大江町埋蔵文化財調査報告書　第８集

K-697

山形県西村山郡大江町

左沢（あてらざわ）楯山城遺跡調査報告書（７）

２００５

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書　第８集

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書（７）

２００５

大江町教育委員会

左沢楯山城全景

左沢楯山城遠景

小竪穴土坑①（C17）

小竪穴土坑②（C17）

序

平成17年１月号として町報が、16年の年末、左沢楯山城を大々的に報じました。町民各位は、十余年の地道で熱意あふるる調査実績を行間に読み取られ、「温故知新」を思い、天空高く舞い上がった大鵬の眼力をもって画かれた、「人と城と山と川」の浮き出たイメージ図で、中世の息づかいと未来へのロマンを感じ取られ、「未来・こころ・自立」に思いを馳せ得たものと思われます。中世の本町俯瞰が可能と思える「鳥瞰図＝イメージ図」でありました。

平成16年度の左沢楯山城遺跡関連調査では、十年余の調査に高い評価を戴きながらも、「広さ」・「高さ」・「深さ」に係る貴重なご指導を山形県、文化庁よりいただきました。左沢楯山城を、郡内・県内・国内の「広さ」の中での歴史文化遺産として、正しく確認すること、後世の批判に耐えうる「高さ」を持った調査を指向すること、遺跡に見える遺構・遺物から当時の人々の思想までも学び取る「深さ」を内包した調査とすること等のご指示・ご指導であったと思われます。改めて、左沢楯山城の「大きさ」を思い知らされ、現代の私たちの常識が、中世左沢楯山城を解きあかす規矩とはなりえない逡巡を感じながらも、「広さ・高さ・深さ・大きさ」に向かって挑戦する勇気と希望が与えられたのでありました。

時潮の流れは、厳しく激しいものがあります。次世代に贈る歴史文化遺産としての左沢楯山城関連事業は、永い時間を、「苦しいときも、楽しいときも」生き抜いてきた先人の証左確認であり、大江町の未来に架かる夢の橋たりうるものであります。橋の設計思想は、町民一人一人が「文化は思想に等しい」とする共通理解の下に支えられていると思われます。中世から現在へ、更には未来へとつなぐ思想を学ぶ橋でもありましょう。今後とも、町民各位の末永いご理解とご厚誼を願う所以であります。

多忙極まりますのに、雛の町にお越し下さりご指導をいただきました文化庁・山形県関係各位の皆様、公開講座を含む調査委員各位、酷暑のなか、発掘調査にあたられた各位のご指導とご協力、並べて今次報告書作成にご指導を賜りました関係各位に御礼と感謝の意を表し、今後のご援助とご高配を衷心よりお願い申し上げます。

大江町教育委員会
教育長　渡　邉　兵　吾

例　言

1．調査名　　左沢楯山城遺跡発掘調査
2．調査期間　　2004年５月17日～７月８日
3．調査面積　　Ｃ地区
　　八幡座東曲輪群　　440㎡
　　寺屋敷入口部分Ｃ12　　50㎡
4．調査体制
　・調査主体　　大江町教育委員会教育文化課
　　鈴　木　修　一（大江町教育委員会教育文化課課長）
　　渡　辺　好　紀（大江町教育委員会教育文化課社会教育主幹）
　　村　上　弘　子（大江町教育委員会教育文化課文化係長）
　　日下部　美　紀（大江町教育委員会教育文化課文化係主事）
　　村　上　宗　紀（大江町町史編さん事務局員）
　・左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧　　問	入間田　宣　夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊　藤　清　郎	山形大学教育学部教授
副委員長	高　山　法　彦	大江町文化財保護委員会委員長
委　　員	川　崎　利　夫	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長
	鈴　木　　勲	河北町史編さん専門員
	北　畠　教　爾	河北町文化財保護審議会委員
	金　山　耕　三	大江町文化財保護委員会委員
	誉　田　慶　信	岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科教授
	大　場　雅　之	山形県城郭研究会員
	松　田　　進	大江町文化財保護委員会委員
	柏　倉　　昇	大江町文化財保護委員会委員
	片　桐　　隆	大江町文化財保護委員会委員

5．　本遺跡の調査について、文化庁文化財部記念物課・山形県教育庁社会教育課文化財保護室よりご指導をいただいた。
7．本調査は、平成10年度から国宝重要文化財等保存整備として文化庁より補助を受けての調査である。
8．　本報告書作成において、第２章について北畠教爾氏、第３・４章について川崎利夫氏、第５章について大場雅之氏に執筆指導をいただいた。
9．現地調査における作業員は下記のとおりである。
　清野辰連・佐竹与惣治・川口邦美・柏倉恒次・田中昭大・星川一・菊池駿介
10．地形図作成　　アジア航測株式会社
11．調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

凡　例

1．左沢楯山城遺跡の略号をＡＴＪとする。
2．遺構の略号は以下のとおりである。
　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＤ…溝跡　　ＳＫ…土坑・井戸跡　　Ｐ…柱穴
3．　左沢楯山城遺跡調査報告書は、大江町埋蔵文化財調査報告書第２集から第７集まで発行されており、今年度平面図及び縄張図の記号・番号を統一したため矛盾する箇所がでてくるが、本報告書の記号・番号に訂正する。
4．Ａ～Ｄ地区については、本報告書第１図左沢楯山城遺跡調査概要図による。

本文目次

第１章　調査経過・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　立地と環境・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・8
　　（１）周辺の遺跡・・・・・・・・・・・8
　　（２）周辺の中世城館・・・・・・・・・11

第３章　八幡座東曲輪群の調査概要・・・13
　第１節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・13
　第２節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・14
　第３節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・19
　　（１）Ｃ11・・・・・・・・・・・・・・19
　　（２）Ｃ12・・・・・・・・・・・・・・21
　　（３）Ｃ13・・・・・・・・・・・・・・22
　　（４）Ｃ15・・・・・・・・・・・・・・22
　　（５）Ｃ17・・・・・・・・・・・・・・22
　　（６）Ｃ19・・・・・・・・・・・・・・25
　　（７）掘抜き井戸・・・・・・・・・・・26
　第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・27

第４章　寺屋敷入口部分C20の調査概要・・29
　第１節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・29
　第２節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・29
　第３節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・30
　第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・30

第５章　縄張調査・・・・・・・・・・・・・・31
　第１節　調査区域・・・・・・・・・・・・・・31
　第２節　Ｄ地区南斜面の調査・・・・・・・・・32
　第３節　あやめ沼周辺の調査・・・・・・・・・33

第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・34

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・40

表目次

表１　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・2
表２　大江町内遺跡一覧・・・・・・・・・・・・11
表３　大江町内中世城館一覧・・・・・・・・・・12
表４　発掘調査経過・・・・・・・・・・・・・・14
表５　出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・27

図版目次

第１図　左沢楯山城遺跡調査概要図・・・・・・・・3
第２図　左沢楯山城遺跡縄張図・・・・・・・・・5
第３図　左沢楯山城遺跡位置図・・・・・・・・・7
第４図　大江町遺跡分布図・・・・・・・・・・・9
第５図　調査位置図・・・・・・・・・・・・・・13
第６図　調査区断面図・・・・・・・・・・・・・15
第７図　八幡座東曲輪群全体遺構配置図・・・・・17
第８図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・20
　①掘立柱建物跡（ＳＢ１）・・・・・・・・・20
　②掘立柱建物跡（ＳＢ２）・・・・・・・・・20
　③掘立柱建物跡（ＳＢ３）・・・・・・・・・20
　④掘立柱建物跡（ＳＢ４）・・・・・・・・・21
　⑤掘立柱建物跡（ＳＢ５）・・・・・・・・・23
　⑥小竪穴土坑跡（Ｃ17ＳＫ１）・・・・・・・24
　⑦千畳敷地下室跡・・・・・・・・・・・・・・24
　⑧掘立柱建物跡（ＳＢ６）・・・・・・・・・25
　⑨掘立柱建物跡（ＳＢ７）・・・・・・・・・25
　⑩井戸跡（ＳＫ２・３・４）・・・・・・・・26
第９図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・28
第10図　Ｃ20全体遺構配置図・・・・・・・・・・29
第11図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・30
第12図　縄張調査位置図・・・・・・・・・・・・31
第13図　Ｄ地区南斜面縄張図・・・・・・・・・・32
第14図　あやめ沼周辺縄張図・・・・・・・・・・33

写真目次

写真１　曲輪状況①・・・・・・・・・・・・・・35
写真２　曲輪状況②・・・・・・・・・・・・・・35
写真３　曲輪状況③・・・・・・・・・・・・・・35
写真４　曲輪状況④・・・・・・・・・・・・・・35
写真５　Ｃ11遺構状況・・・・・・・・・・・・・35
写真６　Ｃ11ＳＤ１・・・・・・・・・・・・・・35
写真７　Ｃ12ＳＢ４西側桁の柱列・・・・・・・・36
写真８　Ｃ12ＳＢ４北側梁の柱列・・・・・・・・36
写真９　Ｃ12Ｐ37・Ｐ36・Ｐ35・・・・・・・・・36
写真10　Ｃ12Ｐ30・・・・・・・・・・・・・・・36
写真11　柱穴断面・・・・・・・・・・・・・・・36
写真12　Ｃ13トレンチ精査後の状況・・・・・・・36
写真13　Ｃ17遺構状況・・・・・・・・・・・・・37
写真14　Ｃ17ＳＫ１・・・・・・・・・・・・・・37
写真15　Ｃ17ＳＫ１・・・・・・・・・・・・・・37
写真16　Ｂ１千畳敷地下室・・・・・・・・・・・37
写真17　Ｃ19遺構状況・・・・・・・・・・・・・37
写真18　井戸跡（ＳＫ４）・・・・・・・・・・・37
写真19　八幡座Ｃ５土坑跡・・・・・・・・・・・38
写真20　現地説明会状況・・・・・・・・・・・・38
写真21　出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・38
写真22　出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・38
写真23　出土遺物③・・・・・・・・・・・・・・39
写真24　出土遺物④・・・・・・・・・・・・・・39
写真25　出土遺物⑤・・・・・・・・・・・・・・39

第１章　調査経過

左沢楯山城遺跡の調査は、平成５年度に左沢楯山城跡調査検討委員会として発足したのに始まる。平成６年度に、名称を左沢楯山城遺跡関連調査委員会と改め、発掘調査及び縄張調査計画をたて、平成７年度の試掘調査に入る。平成７年度から平成９年度の３ヵ年にわたる部分的な試掘調査を経て、平成10年度からは、国宝重要文化財等保存整備費補助事業として国庫補助金を受け、城館の範囲・性格・時代等を明確にすること、その後の保存・整備・活用を考えていくための資料を得ることを目的として発掘調査及び縄張調査を実施してきた。

発掘調査及び縄張調査は、平成５年度に作成した左沢楯山城遺跡概略図に基づき実施してきた。東西1,300m、南北600mの範囲を想定しており、調査地区をＡ地区からＤ地区までの４つの地区に分類している。（第１図参照）

Ａ地区は、家臣の居館が存在したと考えられる元屋敷を中心とする地区である。Ｂ地区は東西に長い地区であるが、これを東側に位置する堀切を境にＢ１地区とＢ２地区に分けている。Ｂ１地区は、千畳敷を中心とする一帯である。Ｂ２地区には、八幡平・楯山公園・山形県立朝日少年自然の家・愛宕神社等が含まれる。Ｃ地区は、Ｂ地区の北方に展開しており、左沢楯山城の山頂となる八幡座を中心とする曲輪群と、寺屋敷を中心とする曲輪群により構成されている。Ｄ地区は、現在の国道458の西側に広がる曲輪群である。

平成５年度から２年間、左沢楯山城の歴史や資料収集・文献調査を実施し、それに基づき城館全体の構造を把握するための表面踏査を実施する。そこで、発掘調査や縄張調査を進めるための基礎となる左沢楯山城遺跡の調査概要図を作成する。地権者からの聞き取り調査を行い、平成７年度から部分的な試掘調査を３年間実施する。発掘調査の事前調査により、城館の大まかな構造や部分的な性格が把握できたところで、平成10年度より大江町教育委員会が調査主体となり、左沢楯山城遺跡関連調査委員会による検討を重ね、国庫補助金を受け、発掘及び縄張調査に入る。城全体の主要と考えられる曲輪群の発掘調査を実施しながら、縄張図を重ね合わせ、各地域の時期差と構造・性格や防御ルートについて明確にしてきた。

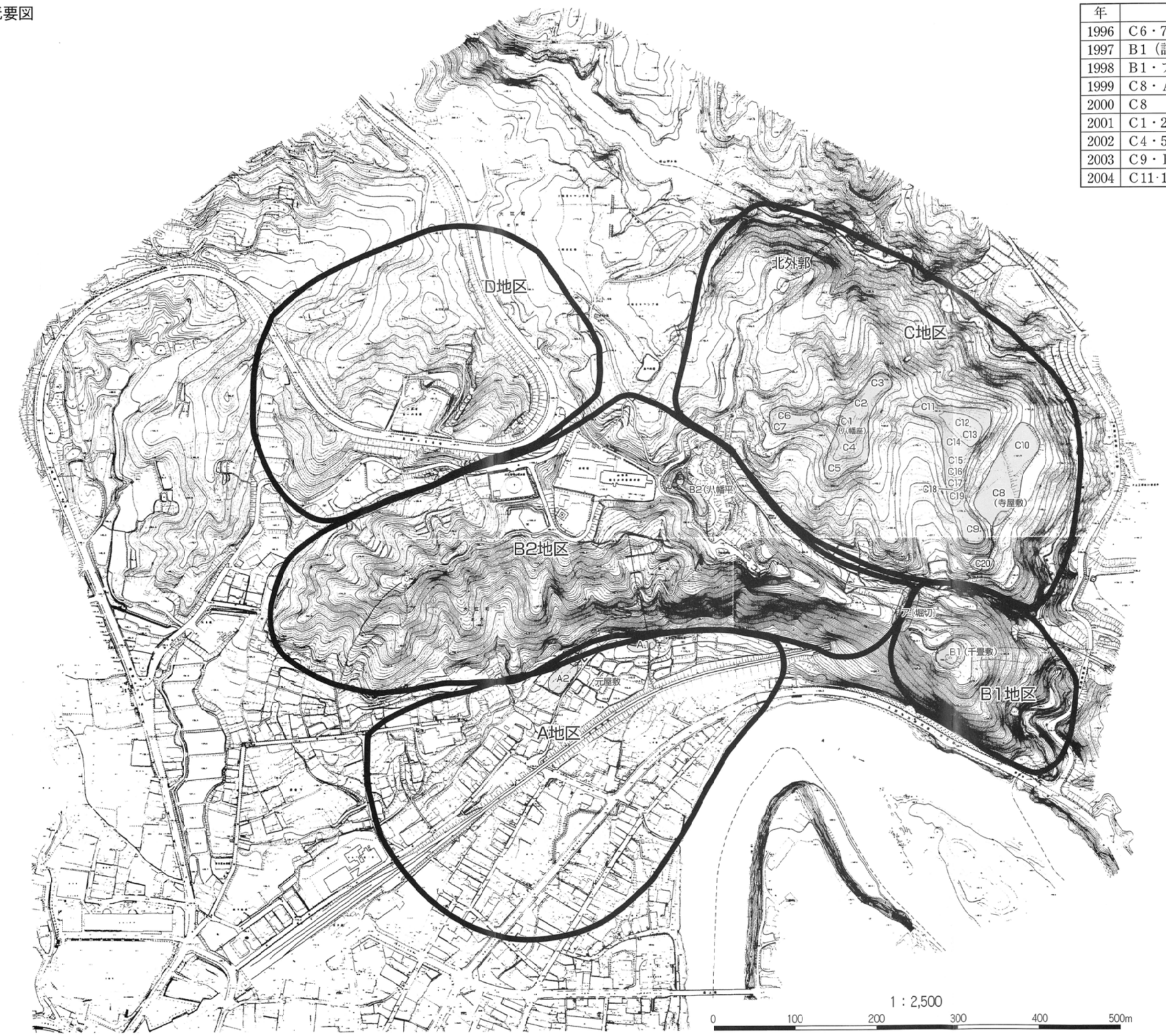
具体的な調査の内容については表１にまとめている。

表１　調査経過

年	目的	調査内容			発掘調査			
		文献	縄張	発掘・試掘	月日	面積	遺構	遺物
1993	歴史と全体構造の把握	文献調査：「金仲山眼明阿弥陀尊略縁起」「天文本大江系図」「性山公治家記録」「天正二年伊達輝宗日記」「最上義光分限帳」						
1994	全体構造の把握	文献調査：「羽州川通絵図」「左沢絵図面」「左沢御領内御絵図」						
			Ｂ地区 千畳敷周辺					
1995	全体構造の把握		Ａ地区 元屋敷	試掘調査 Ｃ地区八幡座	7/26		柱穴跡	
1996	八幡座周辺の構造の把握			試掘調査 Ｃ地区 八幡座Ｃ６・７	7/22～7/29	160㎡	柱穴跡 溝跡	
1997	八幡座周辺の構造の把握			試掘調査 Ｂ地区 千畳敷Ｂ１	8/4～8/21	120㎡	柱穴跡 溝跡	
1998	学術調査		Ｂ地区 千畳敷周辺 Ｃ地区 寺屋敷周辺	Ｂ地区 千畳敷Ｂ１・ア Ｃ地区 寺屋敷Ｃ８	7/31～8/26 11/2～11/8	540㎡ 465㎡	柱穴跡 溝跡 地下室 堀跡	16世紀～近世 陶磁器片
1999	学術調査		Ｂ地区 八幡平周辺 Ｃ地区 寺屋敷周辺	Ｃ地区 寺屋敷Ｃ８ Ａ地区 元屋敷Ａ１・２	8/9～9/6 10/29～11/8	465㎡ 100㎡	柱穴跡 溝跡	16世紀～近世 陶磁器片 鉄製品
2000	学術調査		Ｃ地区 八幡座周辺	Ｃ地区 寺屋敷Ｃ８	8/7～8/30 11/13～11/19	465㎡	柱穴跡 溝跡 池状遺構	9～10世紀 須恵器 中世磁器 16世紀～近世 陶磁器片 鉄製品
2001	学術調査		Ｃ地区 北外郭	Ｃ地区 八幡座 Ｃ１・２・３ 寺屋敷Ｃ８	8/30～10/3	650㎡ 150㎡	柱穴跡 溝跡 池状遺構	16世紀～近世 陶磁器片 砥石　硯 鉄製品
2002	学術調査		Ｄ地区 裏山	Ｃ地区 八幡座Ｃ４・５ 寺屋敷Ｃ９	6/3～7/22	450㎡ 300㎡	柱穴跡 土坑	16世紀～近世 陶磁器片 鉄製品 古銭
2003	学術調査		Ｄ地区 裏山	Ｃ地区 寺屋敷Ｃ９ Ｂ地区 八幡平Ｂ２	5/21～7/17	660㎡ 50㎡	柱穴跡 布堀跡	16世紀～近世 陶磁器片 鉄製品
2004	学術調査		Ｄ地区 裏山 （南斜面・あやめ沼周辺）	Ｃ地区 八幡座東曲輪 Ｃ11・12・13・15・16・17・19 寺屋敷Ｃ20	5/17～7/8	440㎡ 50㎡	柱穴跡 小竪穴	16世紀～近世 陶磁器片 鉄製品

第１図　左沢楯山城遺跡調査概要図

年	発掘調査箇所
1996	C６・７（試掘調査）
1997	B１（試掘調査）
1998	B１・ア・C８
1999	C８・A１・２
2000	C８
2001	C１・２・３・８
2002	C４・５・９
2003	C９・B２
2004	C11・12・13・15・16・17・19・20

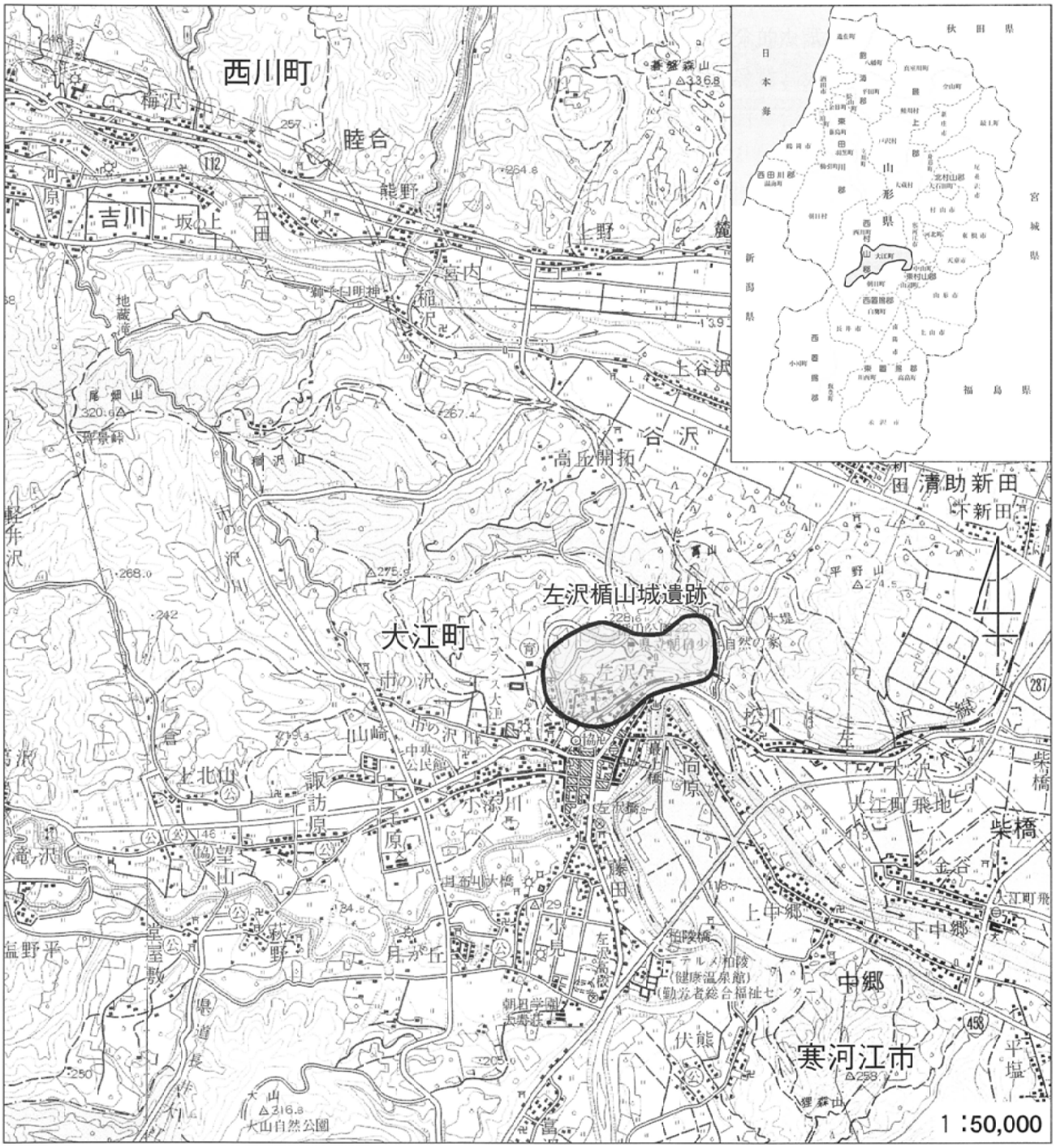


第２図　左沢楯山城遺跡縄張図

年	縄張調査箇所
1998	Ｂ地区（千畳敷周辺） Ｃ地区（寺屋敷周辺）
1999	Ｂ地区（八幡平周辺） Ｃ地区（寺屋敷周辺）
2000	Ｃ地区（八幡座周辺）
2001	Ｃ地区（北外郭）
2002	Ｄ地区（裏山）
2003	Ｄ地区（裏山）
2004	Ｄ地区（裏山）

第２章　遺跡の概要

第１節　立地と環境



第３図　左沢楯山城遺跡位置図

左沢楯山城遺跡が所在する大江町は、山形県村山地域の西村山郡に位置しており、山形県のほぼ中央部にある。東西19㎞、南北12㎞で、面積が153㎢あり、面積の３分の２は標高500m未満の平地と丘陵が占める。大江町の最高地点は、朝日岳の一峰小朝日岳で、標高1,647m、最低地点は最上川にある中河原で標高98mであり、西に高く東に低い地形をなしている。町域の東部を最上川が置賜方面から北流し、

東北端で東へ大きく屈曲し山形盆地に流れ出す。また、小朝日岳を源流とする月布川は、最上川に合流する。町の大半は月布川の流域となっている。

本城跡は、大江町大字左沢字楯山に所在し、町の東端に位置している。最上川が大きく東へ流路を変え、山形盆地に入る曲流部の左岸に位置しているのが町の中心集落となる左沢である。そして、その最上川の屈曲部分に位置するのが左沢楯山城である。城の東と北は檜木沢（楯の沢）の深い渓谷で防御されているとともに、北の富山（標高266m）や東の平野山（標高275m）・鏡山（標高258m）の山と区分されている。南は最上川までの比高は80mあり、眼下に眺めることができ、急崖をなしている。北・東・南の三方が急崖で、天然の要害であるが、西は裏山と呼ばれる丘陵で緩斜面である。（第１・２図参照）

左沢楯山城は、山城としてＢ・Ｃ・Ｄ地区、居館・宿町としてＡ地区の３つの部分から構成されると考えられる。山城であるが、字限図では楯山・愛宕山・裏山・弁財天の区域に相当する。

山城には、最上川を眼下に眺めることができる景勝地として知られる楯山公園があり、西に山形県立朝日少年自然の家・愛宕山がある。この部分をＢ２地区とする。さらに公園から尾根伝いに東へ進むと、鉄砲場・堀切を越えて千畳敷に至る。この部分をＢ１地区とする。Ｂ１・２地区から蛇沢をはさんだ北方は、左沢楯山城で最も標高が高い八幡座（標高222m）と寺屋敷を中心とするＣ地区である。そして、裏山・弁財天のＤ地区がある。

居館は、字限図の元屋敷・愛宕下の区域であるＡ地区である。宿町は、元屋敷の最上川沿の区域で、最上川舟運から発達したの町並であろうと考えられる。

第２節　歴史的環境

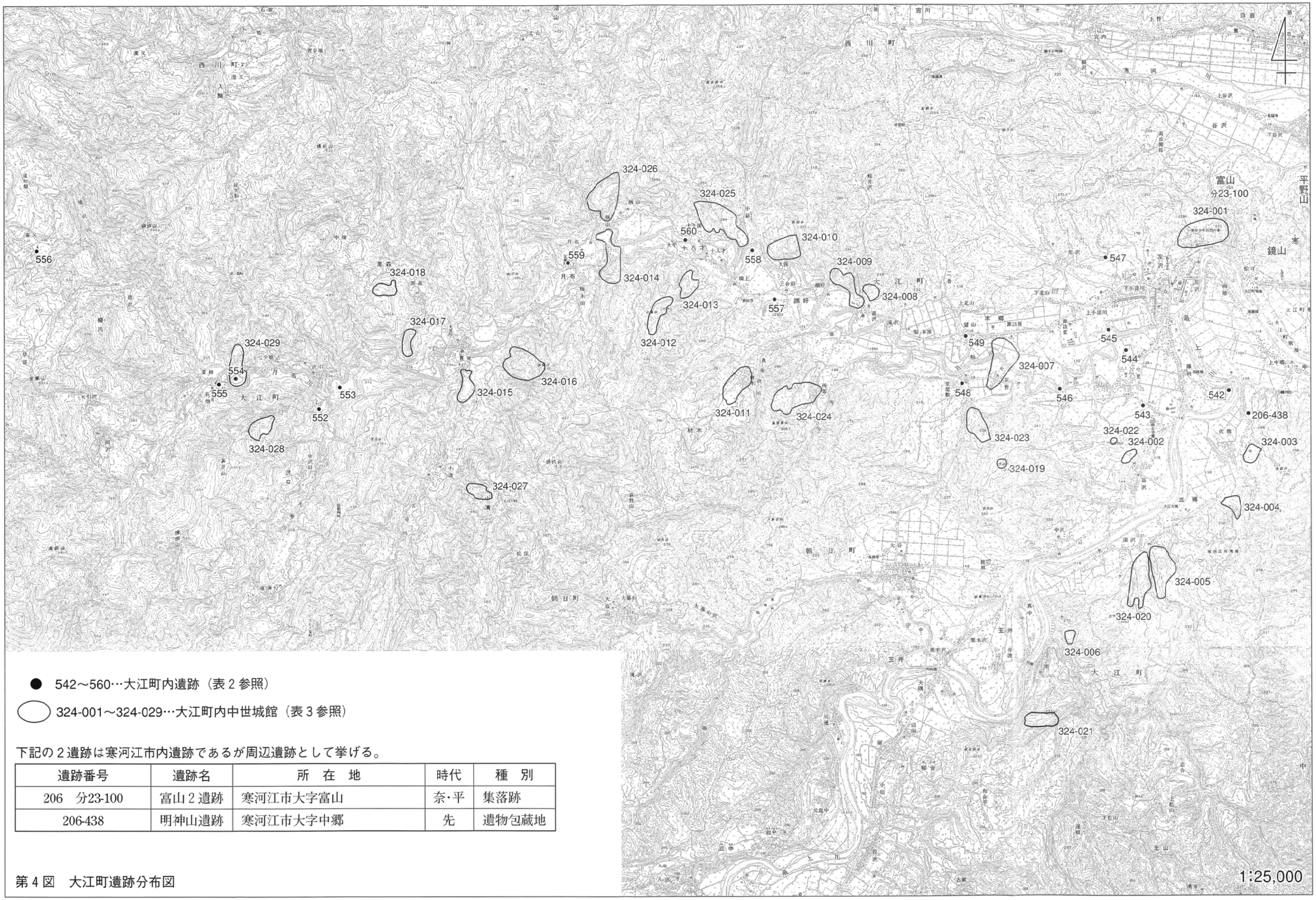
（１）周辺の遺跡

左沢楯山城遺跡周辺の遺跡の分布については、全国遺跡地図（山形県）に登録されているものである。これらの遺跡のほとんどは最上川と小朝日岳を源流とする月布川の河岸段丘面に点在しており、縄文時代の遺跡が多く見られる。

旧石器時代では、庚神山遺跡、最上川を挟んで相対する位置にある明神山遺跡また、富山遺跡（寒河江市）等がある。庚神山遺跡については、標高148m、月布川沿いの河岸段丘に位置している。

縄文時代の遺跡では、最上川・月布川の河岸段丘にその多くが点在しているが、南又・道海遺跡等の山間高地にも見られる。縄文中期の遺跡には、1984年に小規模排水特別対策事業にかかわる緊急発掘調査で大江町教育委員会が調査をした橋上遺跡がある。縄文晩期になると、青柳遺跡・長畑遺跡等がある。

平安時代の遺跡は、藤田遺跡があり窯跡が３ヶ所ほど確認されている。



● 542～560…大江町内遺跡（表２参照）

○ 324-001～324-029…大江町内中世城館（表３参照）

下記の２遺跡は寒河江市内遺跡であるが周辺遺跡として挙げる。

遺跡番号	遺跡名	所　在　地	時代	種　別
206　分23-100	富山２遺跡	寒河江市大字富山	奈・平	集落跡
206-438	明神山遺跡	寒河江市大字中郷	先	遺物包蔵地

第４図　大江町遺跡分布図

表２　大江町内遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所　在　地	時代	種　別
542	藤田原遺跡	西村山郡大江町大字藤田字藤田原275	縄	遺物包含地
543	藤田遺跡	西村山郡大江町大字藤田字藤田山839	平	窯跡
544	小見遺跡	西村山郡大江町大字小見字下原246	縄	遺物包含地
545	下原遺跡	西村山郡大江町大字本郷己字下タ原232	縄	遺物包含地
546	下原Ｂ遺跡	西村山郡大江町大字小見字小見野735	縄	遺物包含地
547	庚申山遺跡	西村山郡大江町大字左沢庚申山	先	遺物包含地
548	堂屋敷遺跡	西村山郡大江町大字堂屋敷203	江	経塚
549	望山遺跡	西村山郡大江町大字本郷丙字前表	縄	遺物包含地
550	大久保平遺跡	西村山郡大江町大字沢口字道海467	縄	遺物包含地
551	道海遺跡	西村山郡大江町大字沢口字道海473	縄	遺物包含地
552	小姓堂遺跡	西村山郡大江町大字沢口字小姓堂28	縄	遺物包含地
553	向田遺跡	西村山郡大江町大字沢口字阿ヨシ184	縄	遺物包含地
554	青柳遺跡	西村山郡大江町大字柳川字壇の腰1490	縄	遺物包含地
555	長畑遺跡	西村山郡大江町大字柳川字壇の腰1592	縄	遺物包含地
556	南又遺跡	西村山郡大江町大字柳川字南又844-3	縄	遺物包含地
557	三合田遺跡	西村山郡大江町大字橋上字三合田	縄	遺物包含地
558	橋上遺跡	西村山郡大江町大字橋上字アントン沢36	縄	遺物包含地
559	月布遺跡	西村山郡大江町大字月布字新坂209	縄	遺物包含地
560	大久保遺跡	西村山郡大江町大字十八才乙字西ノ原189	縄	遺物包含地

※この表は『山形県遺跡地図』2004年度改訂版（山形県教育委員会）によっている。

（２）周辺の中世城館

大江町には左沢楯山城遺跡のほかにも多数の中世城館跡が点在している。表３は山形県教育委員会が上梓した『山形県中世城館遺跡調査報告書』（1996年）によったものである。しかし、その後の調査研究の進展もあって、論点を整理しなければならないものもある。現在、おおよそ次のように考えられる。

鎌倉時代の左沢は、寒河江荘地頭大江氏の支配下にあった。承久の乱後、寒河江荘に潜入した大江親広は一時富沢に住し、荘内の守りを固めるために、富沢に大江匡朝を、対岸の伏熊に中山忠義を配置したとされる（「天文本大江系図」他）。13世紀の末に大江一族が鎌倉から下向して寒河江荘に土着する。月布川流域の開発は早いとされ、諸系図により、顔好・十八才・材木・貫見・要害の城館は13世紀末から14世紀半ばまでに築かれたとする見方がある。しかし顔好・十八才・材木については異論がある。

今日の遺構からみると、沢口・館山・黒森・小清の城館は、最上川沿いの富沢・深沢・三百山の城館とともに、おもに使われた時期幅は16世紀の半ばころから16世紀末くらいとみられ、村の城・百姓の城といわれる形で機能したものかと考えられる。系図類や伝承に現れない葛沢・若松山・小釿・所部・大城などを含めて、町内の城館の成立及び動向については更に精査、検討の要がある。

南朝方であった大江氏は、山形の北朝方である斯波（最上）兼頼に対抗して、寒河江荘内の防御を固めるため城館の構築を行った。大江時茂が築かせたのは、左沢・荻袋（大江町）・白岩・柴橋・寒河江・小泉・高屋（寒河江市）・溝延（河北町）・見附（西川町）などとされる。（「金中山眼明阿弥陀尊略縁起」）。時茂の長子時信（茂信）は溝延に、弟の元時は左沢に城館を築いた。『尊卑分脉』によると、

元時の頭註に「左沢」の文字が記されている。元時が築城した左沢楯山城は、寒河江荘の中で最上川河岸と南西方面のおさえとして築かれたものと考えられる。

表３　大江町内中世城館一覧

遺跡番号	遺跡名	所　在　地
324-001	左沢楯山城	西村山郡大江町大字左沢字楯山
324-002	富　沢　城	西村山郡大江町大字富沢字裏山
324-003	護真寺館	西村山郡大江町大字三郷丙字浦山
324-004	田沢山館	西村山郡大江町大字三郷丙字田沢山
324-005	深　沢　館	西村山郡大江町大字三郷乙字前山
324-006	用大丈館	西村山郡大江町大字三郷甲字大丈
324-007	荻　袋　城	西村山郡大江町大字荻野字上平
324-008	葛　沢　館	西村山郡大江町大字本郷甲字東楯
324-009	顔　好　城	西村山郡大江町大字本郷甲字新顔好表
324-010	若松山楯	西村山郡大江町大字橋上字若松山
324-011	材　木　城	西村山郡大江町大字材木字西浦
324-012	小倉山楯	西村山郡大江町大字十八才甲字横前
324-013	十八才城	西村山郡大江町大字十八才甲字品袋
324-014	大　　城	西村山郡大江町大字月布字大城
324-015	要　害　城	西村山郡大江町大字貫見字要害
324-016	御館山城	西村山郡大江町大字貫見字迎田
324-017	館　山　楯	西村山郡大江町大字貫見字生坂
324-018	黒　森　館	西村山郡大江町大字黒森字横手
324-019	日光山楯	西村山郡大江町大字富沢
324-020	三百山楯	西村山郡大江町大字三郷乙字前山
324-021	南　山　楯	西村山郡大江町大字三郷甲字南山
324-022	手　白　楯	西村山郡大江町大字小見
324-023	岩　木　楯	西村山郡大江町大字荻野字岩木
324-024	所　部　楯	西村山郡大江町大字所部字タイゴ
324-025	小　釿　楯	西村山郡大江町大字十八才乙字岩城
324-026	楢　山　楯	西村山郡大江町大字楢山字横手
324-027	小　清　楯	西村山郡大江町大字小清字斎後
324-028	沢　口　楯	西村山郡大江町大字沢口字トガリ山
324-029	柳　川　楯	西村山郡大江町大字柳川字壇ノ腰

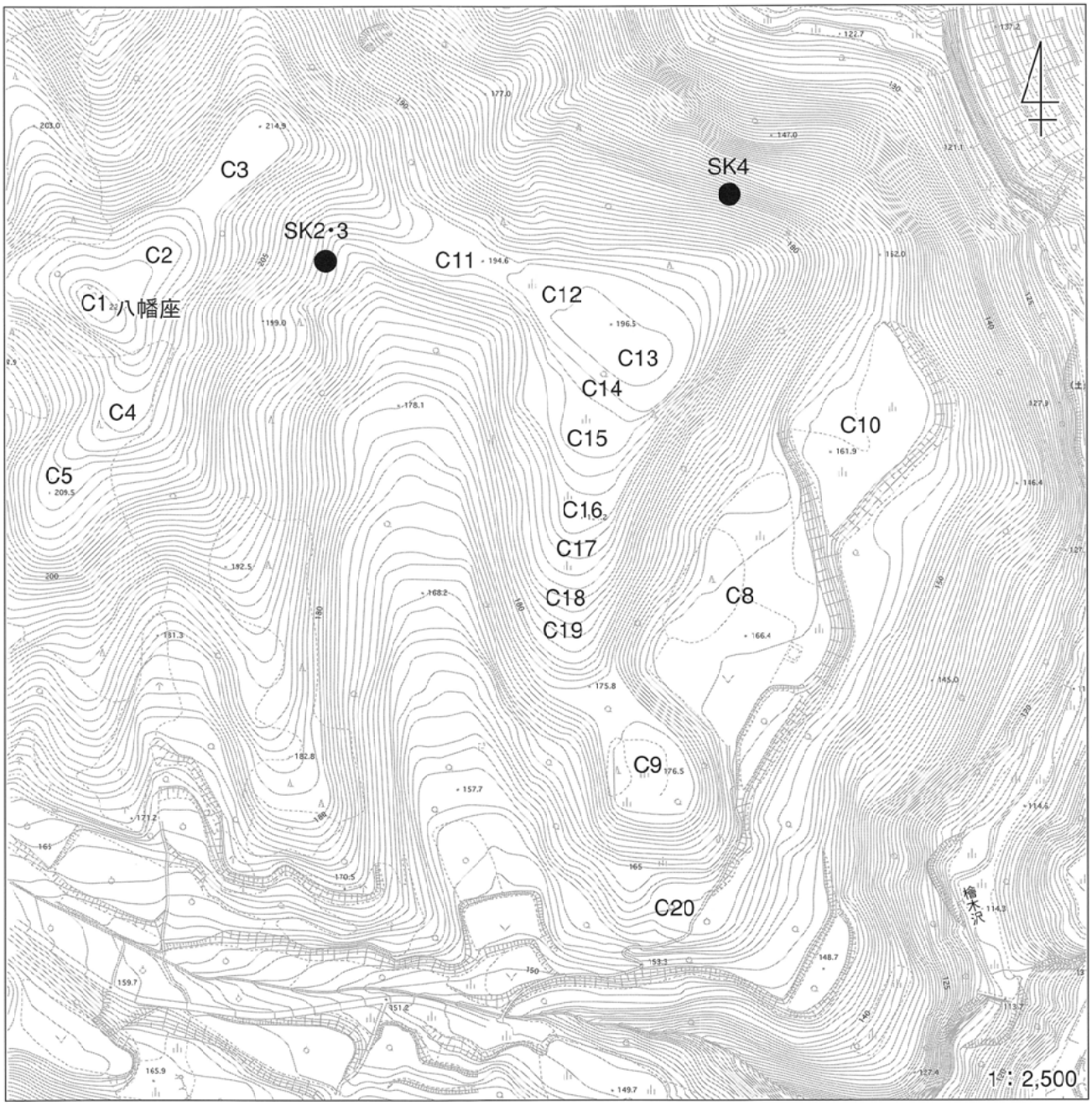
※この表は、『山形県中世城館遺跡調査報告書』第2集　村山地域（1996年）及び山形県遺跡地図2004年度改訂版によっている。（山形県教育委員会）

第３章　八幡座東曲輪群の調査概要

第１節　発掘調査の方法

八幡座の東側に続く曲輪群の調査を実施した。この曲輪群の最頂部Ｃ13は標高196.5ｍであり、そこから西へ２段の曲輪が続く。西からＣ11・12とする。Ｃ13から南に６段の曲輪が続くのを最頂部からＣ14～19とする。その中のＣ11・12・13・15・16・17・19の曲輪に幅２ｍのトレンチを設定し、遺構・遺物等の確認を行った。

遺構の平面及び断面図は、基本的に１／50とした。調査終了後は全ての調査区で埋め戻しを行った。



第５図　調査位置図

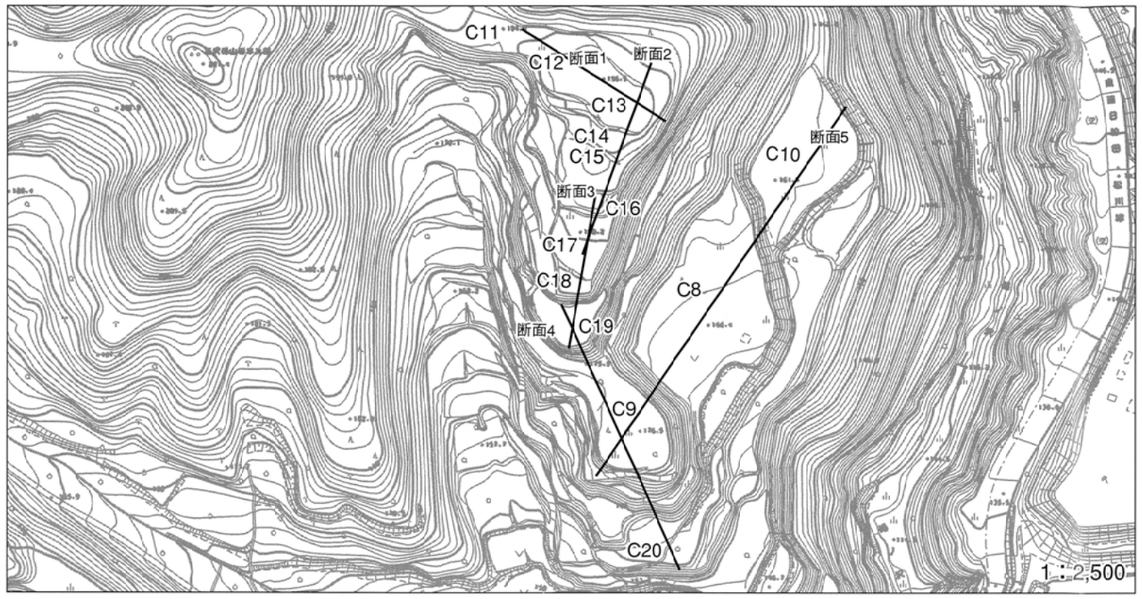
第２節　調査経過

寺屋敷上部西側に10mもの急崖をもって展開する曲輪の調査は、平成14・15年度に実施している。今年度調査をした曲輪群の東側の先端になる曲輪である（Ｃ９）。ここからやや北側に方向を変えて７段の堅固で見事な曲輪が連綿と続き、頂上に達したところで西側に方向を変え、さらに２段の曲輪が続く箇所を八幡座東曲輪群とした。頂上部分をＣ13（標高196.5m）、西側の２段の曲輪を西からＣ11・12とし、頂上から南へ向かう曲輪をＣ14～19とする。その内、比較的面積のある曲輪７箇所にトレンチを設定した。寺屋敷とこの曲輪群の間には帯曲輪があり、さらに西側にも小規模な曲輪群が連なる。

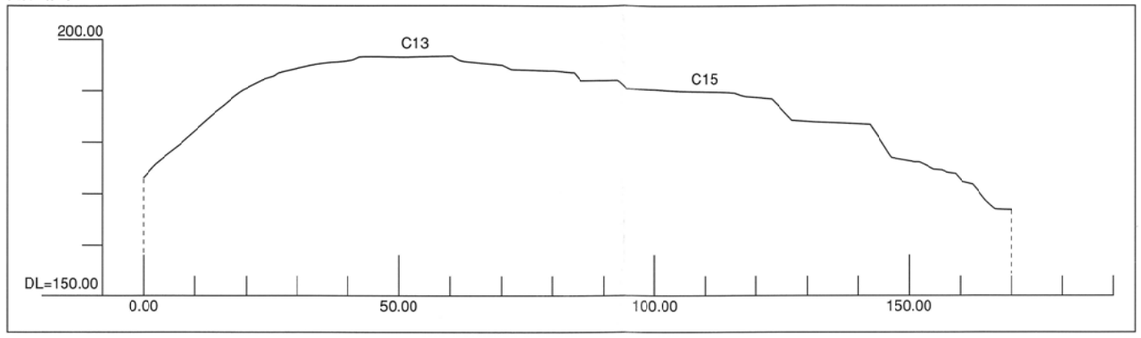
調査期間は、５月17日から７月８日まで、実働32日間である。調査経過は下記のとおりである。

表４　発掘調査経過

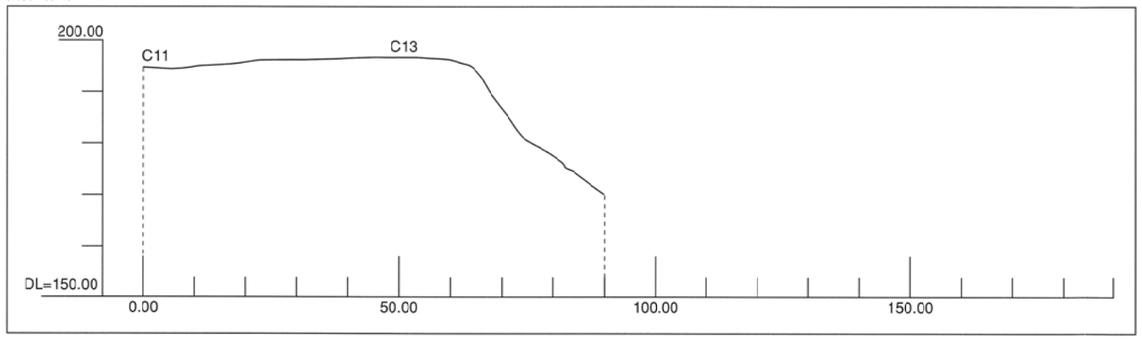
日　時	内　容	遺　構	遺　物
５月17～19日	発掘調査事前準備　通路の下草刈り　調査区矢竹伐採		
５月24日	○鍬入式 ○Ｃ11に１・２トレンチを設定し、表土剥ぎから精査。20～30㎝で岩盤に達する。 ○井戸跡を確認し、精査。	柱穴跡・土坑	
５月25日	○C11の精査。		陶磁器片
５月26日	○C11の精査、C12との段差部分の調査より溝跡を確認。 ○C12に１・２トレンチを設定し、表土剥ぎから精査。20～30㎝で岩盤に達する。 ○C13に１・２トレンチを設定。	溝・柱穴跡	
５月27日	○C11の精査。 ○C13の表土剥ぎから精査へ。粘土質であり、岩盤は確認できない。表土から40～45㎝下がったところで土の色が茶褐色に変わるところを精査。	柱穴跡・溝跡	
５月28日	○C13の表土剥ぎから精査。　○C11のトレンチを一部北側に拡張。	柱穴跡	
５月31日	○C13の表土剥ぎから精査。　雨のため午後の調査を中止。		
６月１日	○C11の拡張トレンチの表土剥ぎから精査。　○C13の精査。	柱穴跡	
６月２日	○C12の精査。　・C15･16･17･19に調査トレンチを設定。	柱穴跡・溝跡	
６月３日	○C11～13の精査。	柱穴跡	
６月４日	○C12の精査と切岸の確認。	柱穴跡	
６月10日	○C12のトレンチを一部拡張し、表土剥ぎから精査。		陶磁器片
６月11日	○C11･12の精査。	柱穴跡	
６月14日	○C11の精査。　○C15の表土剥ぎから精査。遺構は確認できない。		
６月15日	○C12拡張トレンチの精査。 ○C16の表土剥ぎ。20～40㎝で岩盤に達する。遺構は確認できない。		
６月16日	○C17の表土剥ぎから精査。30～35㎝で岩盤に達する。 ○県文化財保護室名和専門員来跡。	柱穴跡 溝跡	陶磁器片
６月17日	○C17表土剥ぎから精査。	小竪穴状土坑	陶磁器片
６月18日	○C17の精査。○C19の表土剥ぎから精査。30～35㎝で岩盤に達する。	柱穴跡・溝跡	
６月21日	○C19の表土剥ぎから精査。	柱穴跡	
６月22日	○C17小竪穴状土坑の精査。　○C19の精査。 ○寺屋敷入口部分に２トレンチを設定。		
６月23日	○寺屋敷入口部分の表土剥ぎから精査。30㎝で岩盤に達する。	柱穴跡	陶磁器片
６月24日	○文化庁玉田調査官、県文化財保護室名和専門員の来跡。		
６月28日	○現地説明会		
６月29日	○写真撮影　○C11の埋め戻し。		陶磁器片
７月１日	○写真撮影　○C11･12の埋め戻し。		
７月２日	○C12・13の埋め戻し。		陶磁器片（C12）
７月５日	○C15～17の埋め戻し。○井戸跡を確認し、精査。	土坑	陶磁器片（C16）
７月６日	○C17・19の埋め戻し。　○寺屋敷入口部分の表土剥ぎから精査。	柱穴跡	陶磁器片（C17）
７月７日	○写真撮影　○寺屋敷入口部分の精査。	柱穴跡	陶磁器片・鉄製品
７月８日	○寺屋敷入口部分の埋め戻し。		



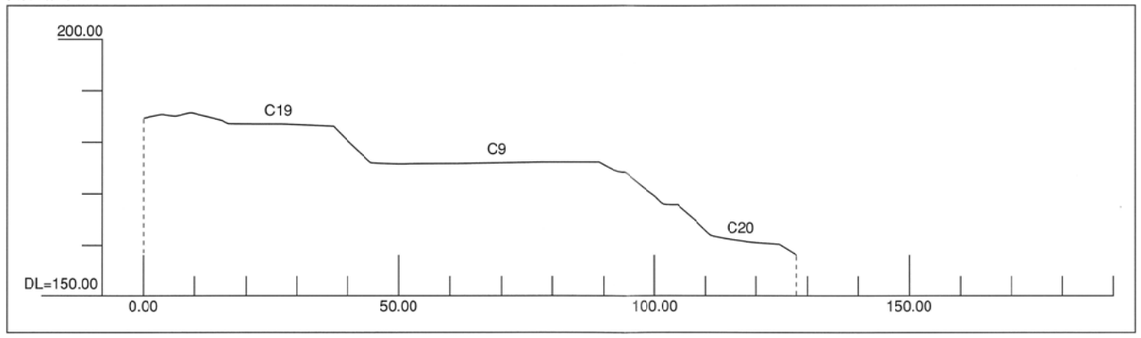
断面図 2



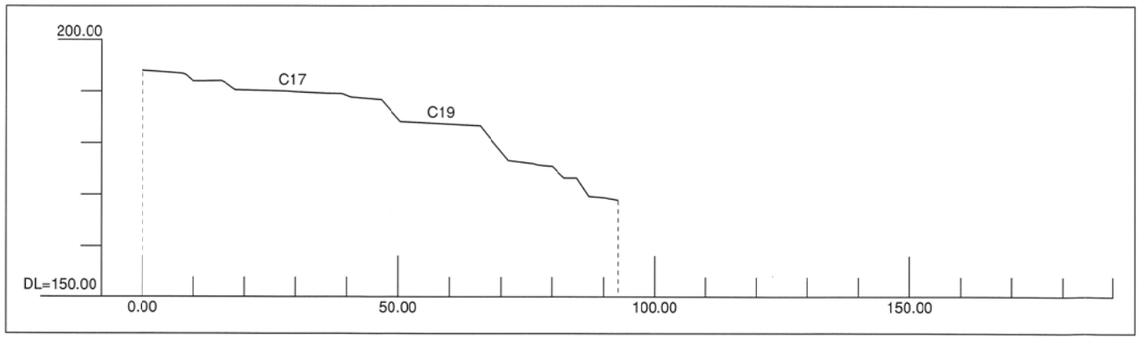
断面図 1



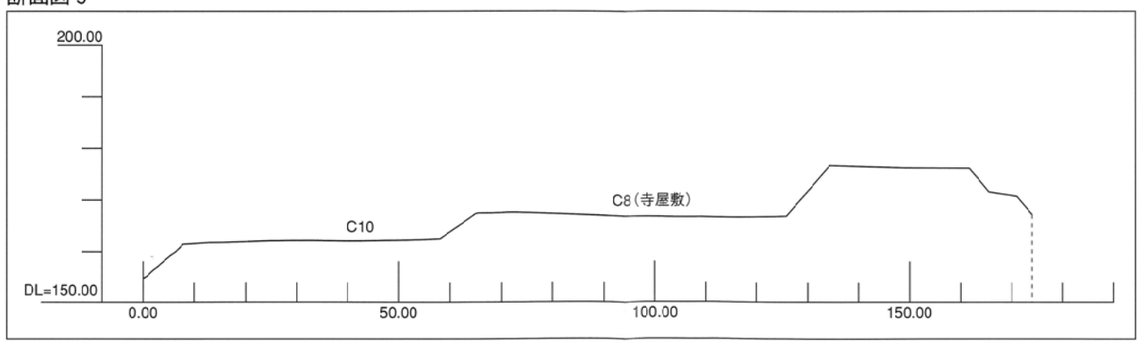
断面図 4



断面図 3



断面図 5



1：400

第 6 図　調査区断面図

1：2,500　第７図　八幡座東曲輪群全体遺構配置図

第３節　検出遺構

（１）Ｃ11

Ｃ11は、この曲輪群の最も西側に位置している。標高194.6mであり、東西24m、南北の最大幅は12.5mの細長い曲輪である。この曲輪の西側の部分は北から南に向かい、傾斜が強く、約１m下がる状況が確認できる。Ｃ11の南端から、幅2.5mの通路が位置している。この通路は、Ｃ12の下を通りＣ13へ、またはその下に続く曲輪群へのルートとなっている。

曲輪の中央に幅２mの直行するトレンチを設定する。１トレンチは、２m×28m、２トレンチは２m×９m、さらに北側に２m×５m、１m×２mの拡張トレンチを設定して遺構の状況を確認した。全てのトレンチにおいて地山から20～30㎝下がったところで岩盤に達する。岩盤までの層は均一であり、質が違う土の混在は認められない。本遺跡は、その大半がもともとあった曲輪を利用して畑を耕作していたことが地権者の話によって確認されている。遺構が認められる岩盤までの１層については、このときの耕作土であり、山砂利混入黄褐色土である。

曲輪の西側にまとまった柱穴跡があり、全てにおいて岩盤をくりぬいて柱を据えた状況が確認できる。柱が抜き取られており、柱の痕跡は認められない。表土面から岩盤までの層と同様の土が確認できる。

ＳＢ１

曲輪西側から2.25～3.57m間隔で柱が並ぶ東西棟の建物跡の北側４間の桁の部分が確認できる（Ｃ11Ｐ１・２・11・18・22）。円柱で、大きさは25～45㎝、深さは40～75㎝である。

ＳＢ２

南北に並ぶ柱穴跡３基（Ｃ11Ｐ14・13・46）が建物の桁の部分であることが確認される。1.5～1.75mの間隔で円形・楕円形であり、大きさは25～35㎝、深さは35～52.5㎝である。

ＳＢ３

曲輪の東側に1.85～2.15m間隔で柱が並ぶ東西棟の建物跡、北側３間の桁の部分が確認できる（Ｃ11Ｐ24・27・31・32）。隅丸正方形で、大きさは27.5～45㎝、深さは40～67.5㎝である。

ＳＤ１

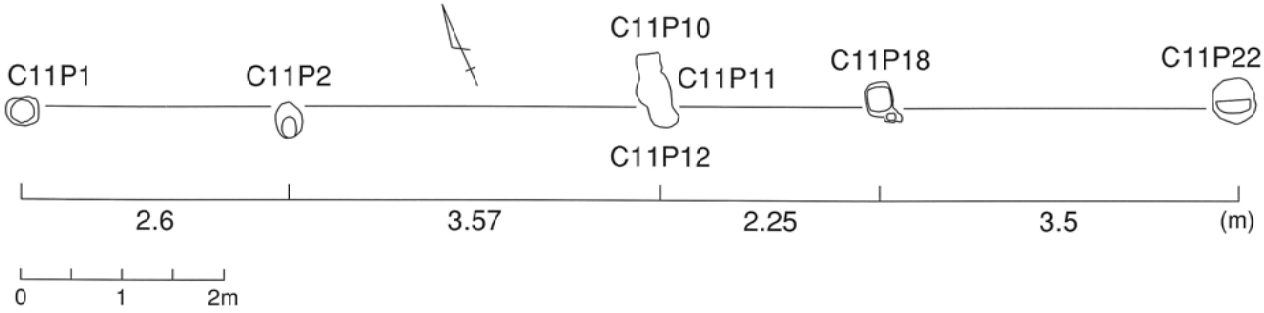
曲輪東側、Ｃ12に連続する部分に溝跡がある。調査前の表土面からもその落ち込みは確認できた。幅20㎝、深さ25㎝の溝が、曲輪の北から南に、トレンチの外にのびている。柱穴跡と同様に岩盤をくりぬいており、この曲輪を耕作の畑として利用していたころに作られた溝であるとは考えられない。埋土は同様に山砂利混入黄褐色土であり、遺物は検出されていない。この溝はＣ11とＣ12の境目に位置しており、すぐ東側（Ｃ12）は約１m程度高くなっている。北から南にむかい地形が傾斜していることから、建物に関連する水を流すための溝と考えられる。

第８図　遺構配置図

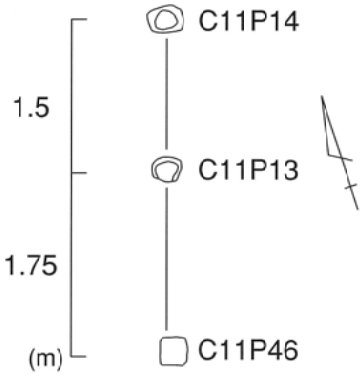
①掘立柱建物跡（SB1）

SB1　(cm)

番号	深さ	大きさ
C11P1	45	30×30
C11P2	40	25×25
C11P10	80	22.5×20
C11P11	75	32.5×32.5
C11P12	75	25×25
C11P18	62.5	25×32.5
C11P22	75	42.5×45



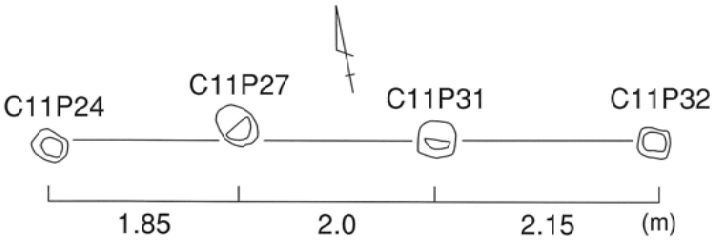
②掘立柱建物跡（SB2）



SB2　(cm)

番号	深さ	大きさ
C11P13	35	25×25
C11P14	52.5	35×35
C11P46	50	27.5×25

③掘立柱建物跡（SB3）



SB3　(cm)

番号	深さ	大きさ
C11P24	52.5	32.5×27.5
C11P27	67.5	45×35
C11P31	55	35×35
C11P32	40	30×27.5

※第７図参照

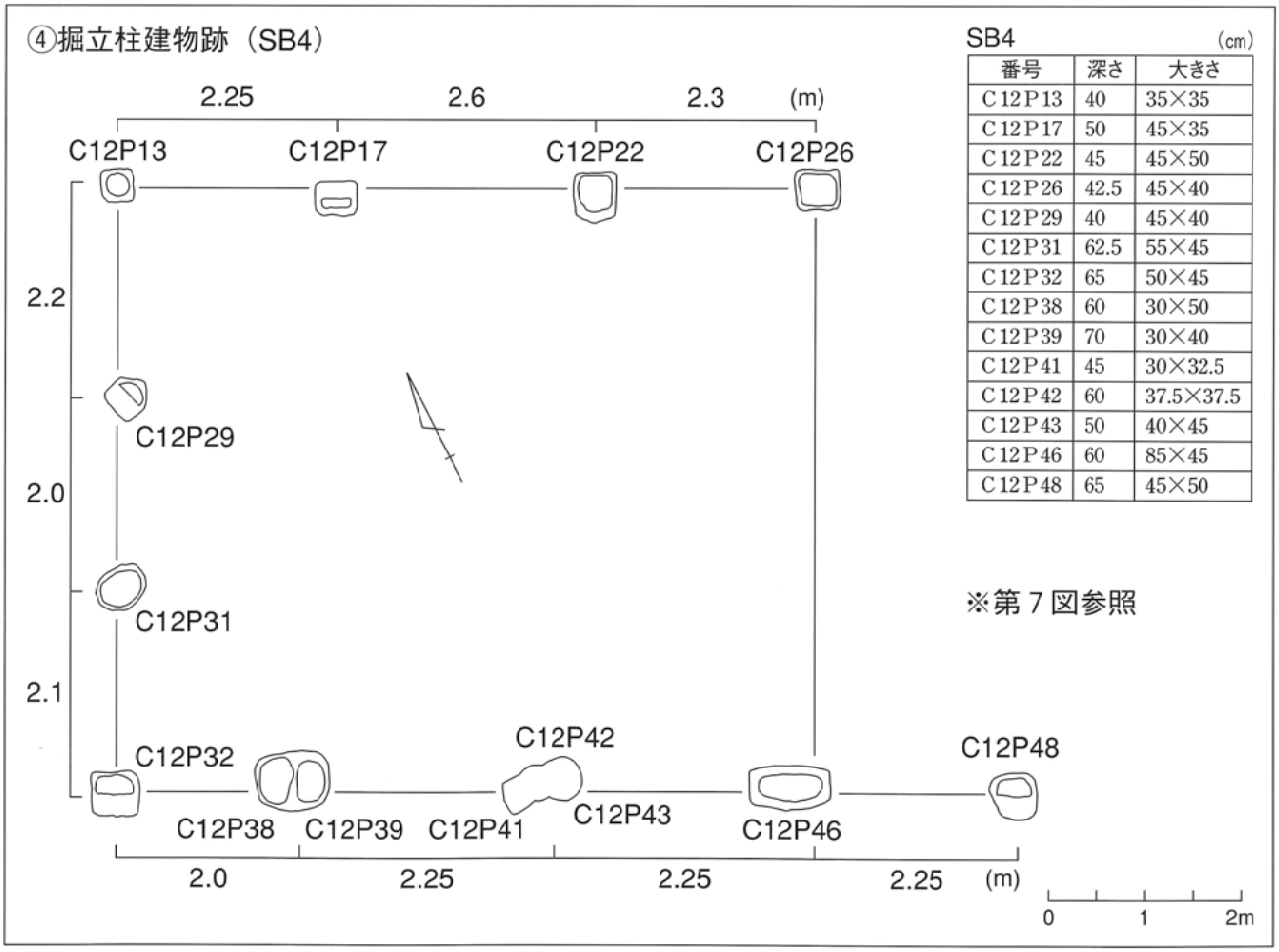
（2）C12

C11から50㎝程度高い段差がある東西35.3m、南北19.5mの細長い曲輪がC12である。C11からC13は東西に連続する曲輪群になっており、その北側は檜木沢のきわめて深い渓谷で、人工的な手を加える必要のない天然の要害となっている。

曲輪の中央部分に幅2mの3つのトレンチを設定した。1トレンチは、東西に32m×2m、それに直行する2トレンチは18.5m×2m、2トレンチを起点に1トレンチと南側に4.5mおいて平行する3トレンチを13m×2mとして遺構の状況を確認した。C11と同様に地山から20～30㎝下がると岩盤に達する。そこに層は認められず、均一であり、山砂利混入黄褐色土である。

SB4

曲輪の東側よりまとまった柱穴跡が確認できた。3間×3間の東西棟の掘建柱建物跡が認められる。西の桁の部分は2.0～2.2mの間隔で柱が並び、隅丸正方形または円形で、大きさは35～55㎝、深さは40～65㎝である（C12P13・29・31・32）。東の桁の部分は、両端の柱穴跡が確認できる（C12P26・46）。北の梁に並ぶ柱穴跡は隅丸正方形で、大きさは35～45㎝、深さは40～50㎝である（C12P13・17・22・26）。南の梁は、隅丸正方形または円形で、大きさは40～60㎝、深さは40～65㎝である（C12P32・38・39・42・46）。その中で抜きとり痕が認められる柱穴はC12P22・28・29、重複している柱穴はC12P38・39、C12P41・42・43であり、2～3回程度の建て替えがあったことが考えられる。柱穴の掘り込みの土の状況は、表土面から岩盤に達するまでの土の状態と変わらず、山砂利混入黄褐色土である。柱が残っている状況は認められず、遺物も検出されない。全て抜きとった跡であることが確認できる。



SB4 (㎝)

番号	深さ	大きさ
C12P13	40	35×35
C12P17	50	45×35
C12P22	45	45×50
C12P26	42.5	45×40
C12P29	40	45×40
C12P31	62.5	55×45
C12P32	65	50×45
C12P38	60	30×50
C12P39	70	30×40
C12P41	45	30×32.5
C12P42	60	37.5×37.5
C12P43	50	40×45
C12P46	60	85×45
C12P48	65	45×50

（3）C13

C13は、この曲輪群の最頂部で、標高196.5mである。東西11m、南北15mの小曲輪であるが、四方を見渡せる眺望のきく位置にある。曲輪中央に直行する2つのトレンチを設定した。他の調査区で確認できる岩盤がここでは認められず、1層は、非常にしまりの強い灰白色粘質土があり、その下2層も非常にしまりの強い黄褐色粘質土が認められた。40～45cm下で、2層の黄褐色粘質土に変わったところで精査し、遺構の状況を確認したが、認められなかった。岩盤はその下にも確認することができず、粘土質の土で盛って高くしている状況が把握できる。土を盛って高くすることで、四方に睨みをきかす役割を果たしていると考えられる。

（4）C15

最頂部であるC13から南に方向を変えて、その下に6段の曲輪群が連続している。その中の、C14は、C13の1.5m下に小曲輪が配置される。ほぼ中央に少しの段差が認められるが、東西21.7m、南北13.7mであり、東側が南方向に3.5mほど張り出している。さらにその下、南の方向に2mの段差を持ってC15が配置されている。東西18.5m、南北15mの曲輪である。その中央部分に直行する2つのトレンチを設定し、遺構の状況を確認した。1トレンチは14.5m×2m、2トレンチは17m×2mである。表土面から30～40cmで岩盤に達する。十分に小屋掛けが可能な面積を持つが、遺構は認められない。C15の下、南の方向に60～70cmの段差をもってC16が配置される。東西15m、南北7mの小曲輪である。C15の表土面から岩盤までの層は1層であり、C13ほどのしまりの強さはないが、ややしまりのある黄褐色粘質土である。出土遺物は、C15より近世陶磁器の小破片2点である。

（5）C17

C16から南の方向に2m下がる段差をもって、東西17m、南北20mのこの曲輪群の中でも比較的広い面積をもつ曲輪が配置される。曲輪の中央部分に直行する2つのトレンチを設定し、遺構の状況を確認した。1トレンチは20.5m×2m、2トレンチは17.5m×2mである。30～35cmで岩盤に達する。表土面から岩盤はでの層は1層で、山砂利混入黄褐色土である。

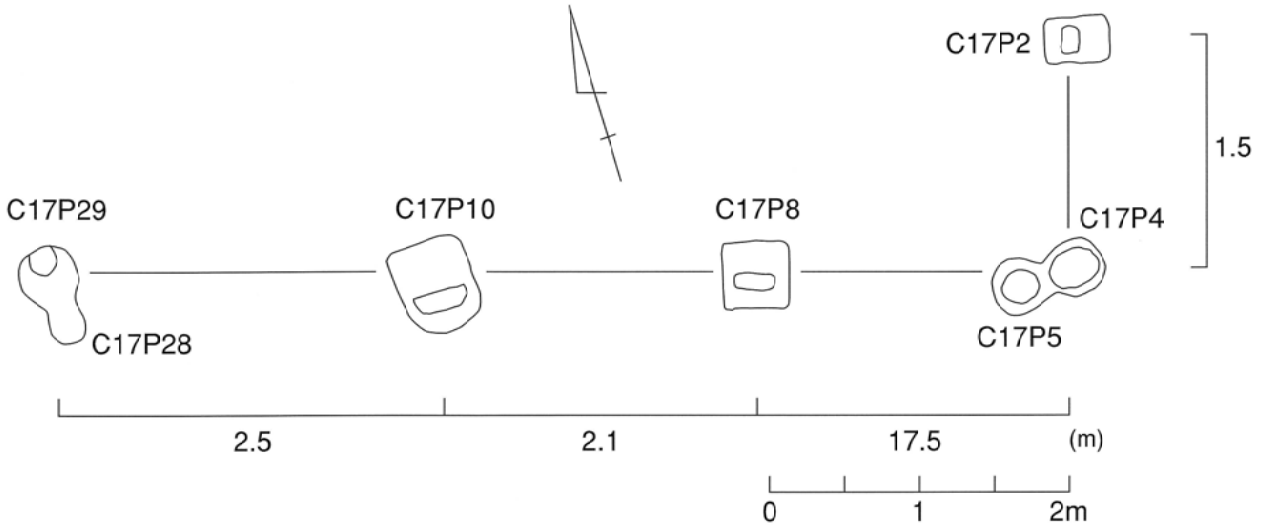
SB5

曲輪の北側からまとまった柱穴跡が確認された。1.5～2.5mの間隔で並ぶ柱列、C17P29・10・8・（5・4）・2を確認した。南北棟建物の東の桁の部分であると考えられる。円形または隅丸長方形で、大きさが35～60cm、深さは50～72.5cmである。その中で、C7P4・5と、C17P28・29は重複しており、C17P10には抜きとり痕が認められるため、2～3回の建て替えがあったことが分かる。

⑤掘立柱建物跡（SB5）

SB5 (cm)

番号	深さ	大きさ
C17P2	62.5	37.5×30
C17P4	70	35×35
C17P5	62.5	35×35
C17P8	72.5	45×45
C17P10	50	60×52.5
C17P29	55	40×40



※第７図参照

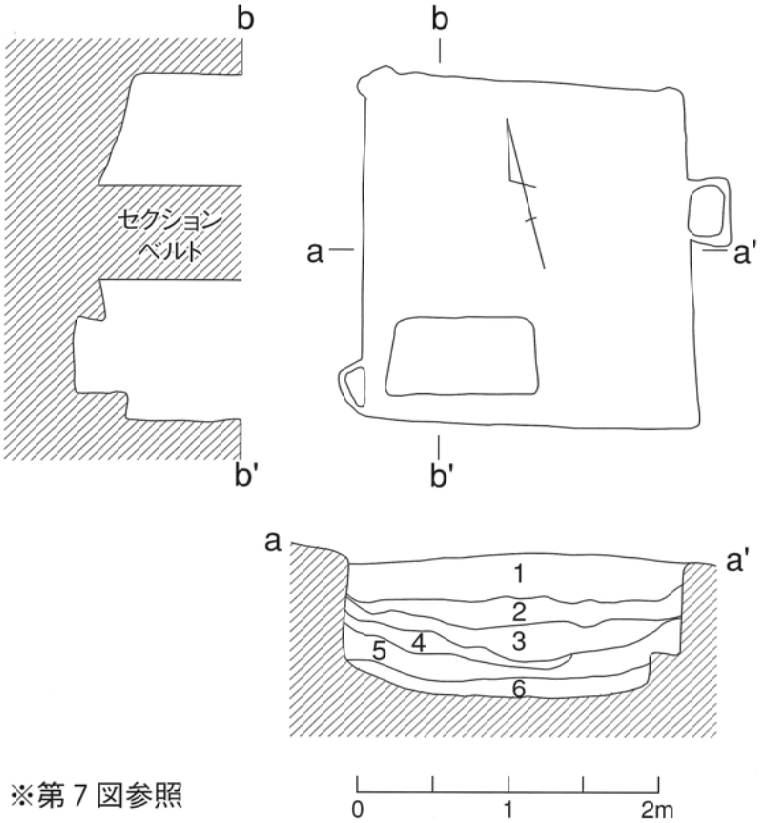
ＳＫ１

ＳＢ５の南側に２ｍ四方の小竪穴土坑が確認される。壁面は底面に対して直角に削られており、底面の四隅とその中間に柱を据えるための根固め石が設置されている。小屋掛けしたと考えられる。深さは、中央に向かってやや深くなっており、中央が100㎝、両端が80㎝である。土坑の中央に50㎝のセクションベルトを残し、層の確認をした。表土面から、山砂利混入黄褐色土、粘質灰褐色土、山砂利混入黒色土、木炭層、山砂利混入黄褐色土、軟質凝灰岩層の６層である。また、土坑の南東隅に大きさが100㎝×50㎝で、深さが40㎝の隅丸長方形の土坑が認められた。この土坑からの遺物は確認できないが、何かを貯蔵するための土坑であると考えている。

同じような小竪穴状土坑は千畳敷にも認められる。千畳敷のほうはＣ17よりも大きく、長さが北西に4.6ｍ、幅が南東に2.6ｍ、深さが1.6ｍの主室部に、長さが2.4ｍ、幅1.1ｍの通路が東側切岸崖面にむかって開口している。ここは、籠城時に食料や武器などを貯蔵・保管するため、一方では戦闘時に迂回するために利用するような機能を併せ持つ地下室という性格であることは『左沢楯山城遺跡調査報告書』第２集で報告しているとおりである。

⑥小竪穴土坑跡（C17SK1）

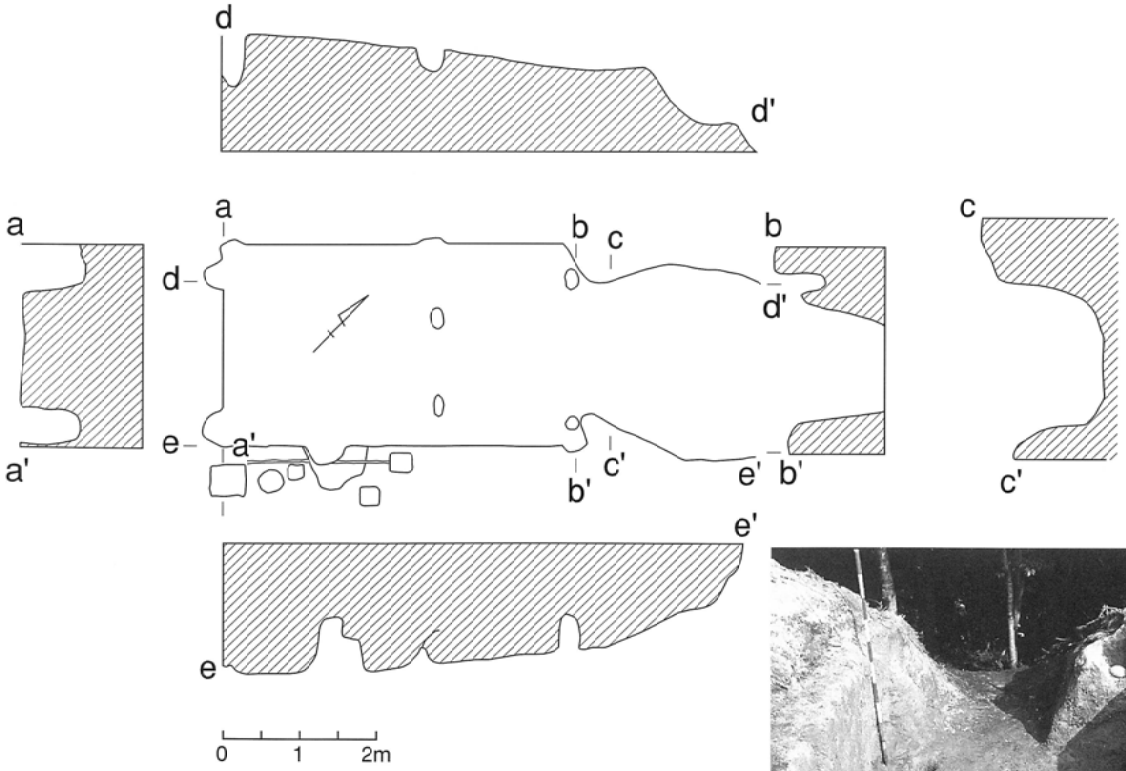
1	山砂利混入黄褐色土
2	粘質灰褐色土
3	山砂利混入灰黒色土
4	木炭層
5	山砂利混入黄褐色土
6	軟質凝灰岩層

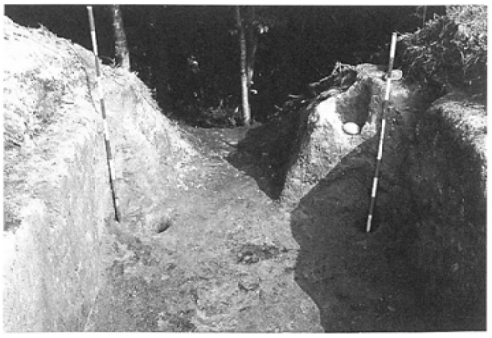


C17SK1　東側断面

※第７図参照

⑦千畳敷地下室跡





東側切岸に抜ける通路

（6）C19

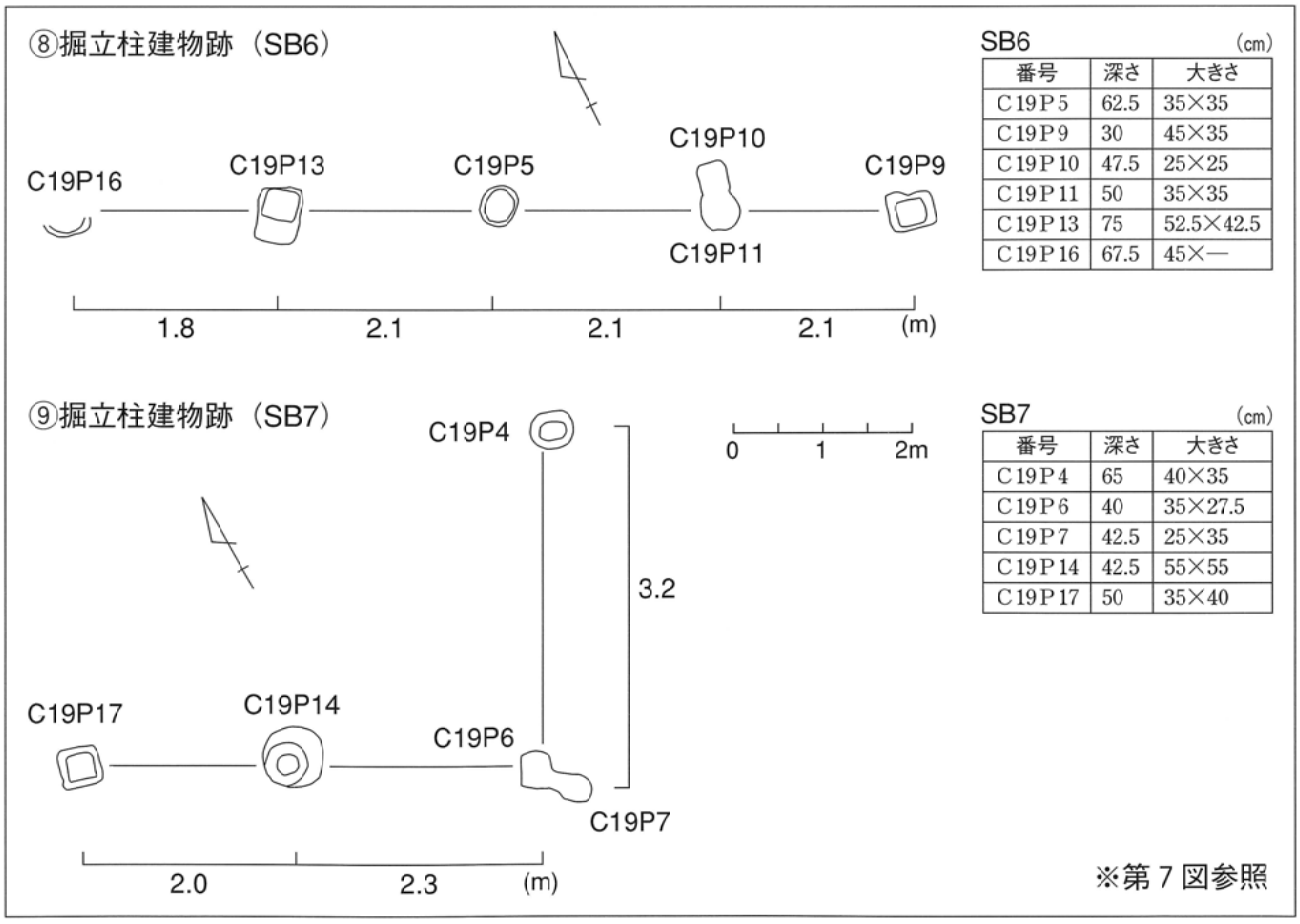
C17から南の方向に50cmほど下がると東西９ｍ、南北の最大幅が6.5ｍの小曲輪C18が配置される。C18からその下に位置するC19までは、高さ７～８ｍの非常に急で強固な切岸を持つ。ここから南東に方向を変えて寺屋敷上部C９、そしてC９の下であり、C13～C19の東下に寺屋敷C８が配置されているが、ここにも10m程度の非常に強固な切岸が存在する。寺屋敷C８を囲む曲輪までは、意識された非常に強固な曲輪が配置されていることになる。C19の標高は180mであり、この曲輪群の最頂部であるC13からC19までの距離は約80m、比高差は16.5mである。C19は東西13.5m、南北12.5mであり、曲輪中央に２つのトレンチを設定した。１トレンチは、12m×２m、２トレンチは11m×２mである。30～35cmで岩盤に達するが、その層は１層で、山砂利混入黄褐色土である。

ＳＢ６

2.3m間隔で東西に並ぶ５基の柱列を確認している。建物の南梁の部分と考えられる（Ｐ16・13・５・11・９）。隅丸長方形または円形の大きさが35～52.5cm、深さが30～67.5cmである。Ｐ11に柱穴の重複が認められるので、２～３回の建てかえがあったと考えられる。

ＳＢ７

ＳＢ６に重なって南北棟の掘立柱建物が確認できる。南の梁の部分に2.0～3.2m間隔でＰ６・Ｐ14・Ｐ17の３基の柱列があり、それが北側に広がる。その東側の桁の一部分がＰ４である。円形または正方形であり、大きさは35～55cm、深さは40～65cmである。Ｐ６に重複が認められるので、２～３回の建て替えがあったこと考えられる。



SB6 (cm)

番号	深さ	大きさ
C19P5	62.5	35×35
C19P9	30	45×35
C19P10	47.5	25×25
C19P11	50	35×35
C19P13	75	52.5×42.5
C19P16	67.5	45×—

SB7 (cm)

番号	深さ	大きさ
C19P4	65	40×35
C19P6	40	35×27.5
C19P7	42.5	25×35
C19P14	42.5	55×55
C19P17	50	35×40

（7）掘抜き井戸

C11から西方向に約40mのところ、C13から桧木沢の急崖を約10m下がったところに雨水等を溜めたと考えられる土坑跡3基を確認した。C11西側にSK2・3、C13北側にSK4が位置している。いずれも日があたりにくい崖面の下にあり、調査前の表土面が窪み、現段階でも水が溜まりやすい位置にある。土坑中の層については半ばまでは山砂利混入黄褐色土であり、その上に落ち葉などが重なった状態で窪んでいることが確認できる。完掘後は、時間を置くと自然に水が溜まる状況も認められた。3基ともに、柱穴跡と同様に人工的に岩盤を削り、くりぬいている。

SK2・3

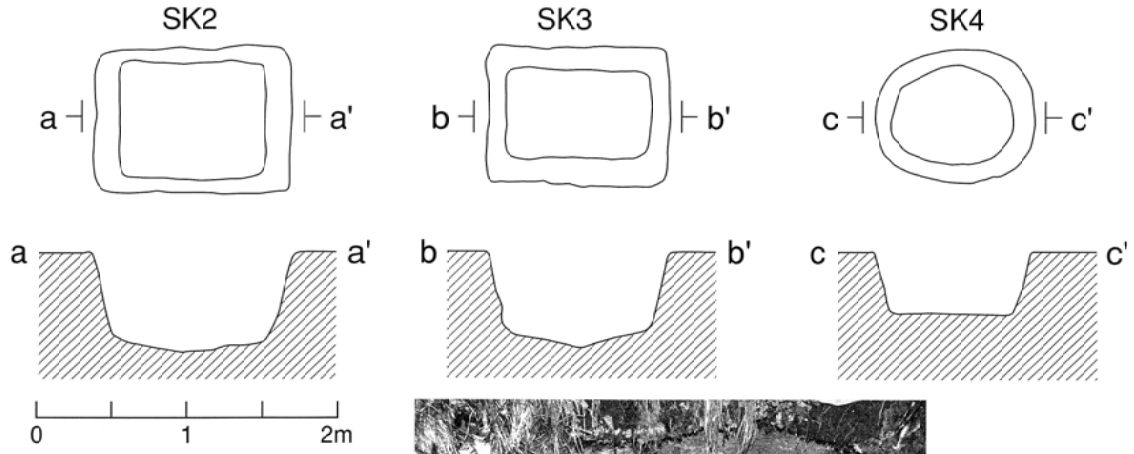
SK2・3は40cmの間隔をおいて並んでいる。SK2は大きさが130cm×100cm、深さが中央に向かって傾斜しており、深いところで65cmの長方形である。SK3は大きさが120cm×90cm、深さは中央に向かって傾斜しており、深いところで60cmの長方形である。

SK4

100cm×100cmの円形で、深さは底面が平らで45cmである。SK4が位置している場所は桧木沢にむかう崖面の途中であり、さらに下に向かって急崖が続いている。さらにSK4に一度溜まった水が溢れて下に流れた跡が表土面からも確認できる。幅30～40cm、深さが20～30cmの溝がSK4から下の桧木沢にむかっている。その状況は、落ち葉等をはらうと確認できる状況である。

左沢楯山城内の水場として、このような掘抜き井戸が要所要所に設置されていたことが考えられる。同じような遺構を八幡座周辺C4・5より確認している（『左沢楯山城遺跡調査報告書（5）』2002年）。C4より3箇所、C5より7箇所に、大きさが1.1～1.7m、深さが60cm程度であり、壁面が底面に対して直角の円形土坑である。

⑩井戸跡（SK2・3・4）



※井戸跡の位置は第5図を参照

SK2

第４節　出土遺物

遺物は15点出土している（第９図９-１～15）。その大半が近世陶磁器の小破片である。

磁器片（９-１・２・３・４・５・６・７・８・９・12・13・14）

磁器片は12点である。その種別は皿及び碗の小破片である。口縁部の形状は、９-１・３・５・６が直行し、９-４・８は外反する。また９-７は内彎し、９-２は外傾している。９-９・12・13・14の口縁部の形状は不明である。色調は９-１・７は全体的に青味をおびており、９-５は内面に青の釉が施され、外面が全体的に青味をおびる。９-４・６は内面に１～２本の青の界線がめぐり、９-２は外面に青の界線がめぐる。９-３は外面の口縁部端に連続渦文が見られる。９-１４は内外面に染付の一部が見られる。９-９は見込の部分内外面ともに周辺をこん色の界線がめぐる。その底にあたる部分の中央には略化した連弁帯が施されている。

景徳鎮様磁器

景徳鎮様磁器は１点である。その種別は高台付皿である。見込に青で花文と思われる文様が描かれ、その外面にも青の文様が見られる。全体的に釉が施されているが、高台の内面は釉剥ぎされている。

陶器

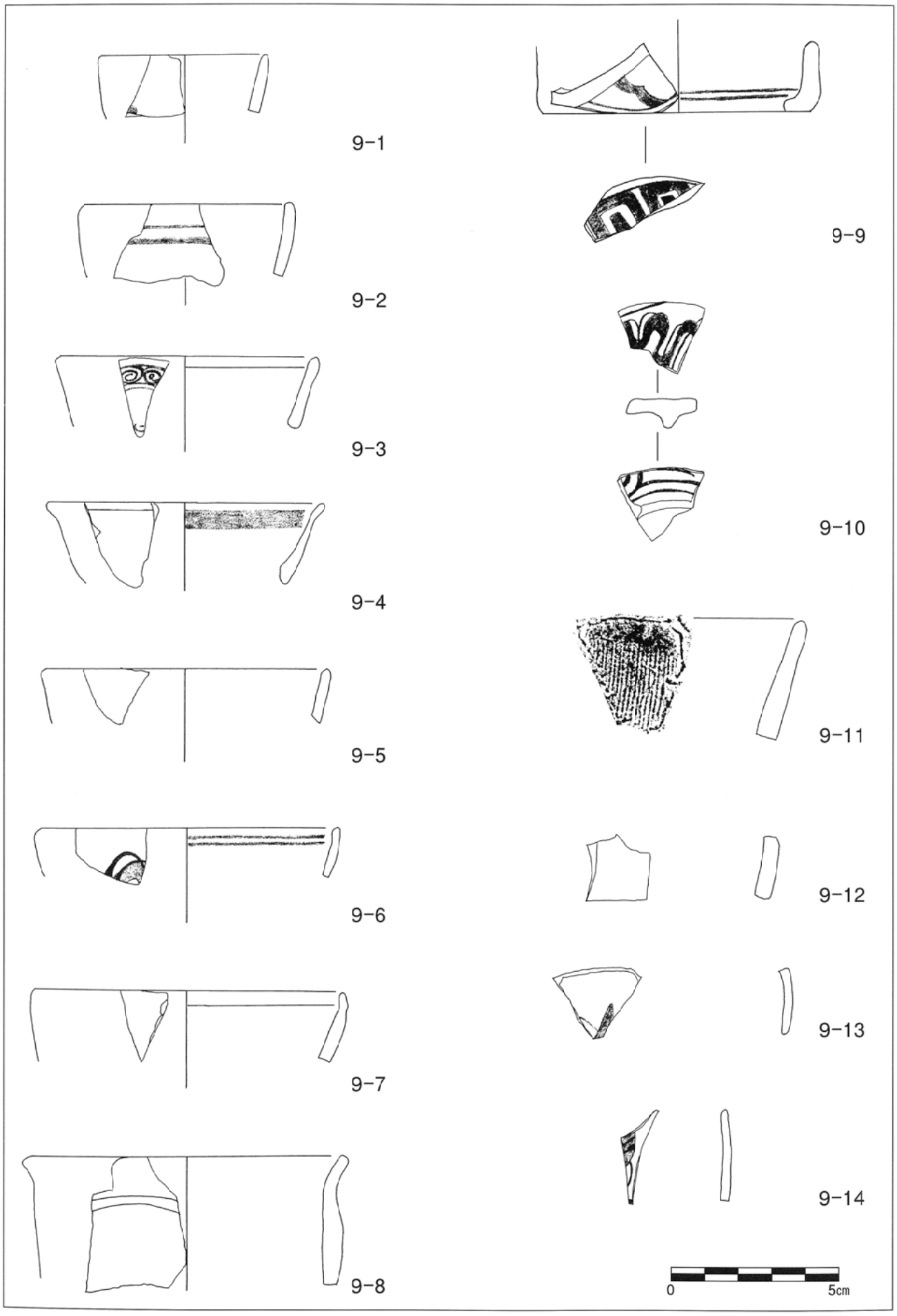
陶器は１点で、その種別は擂鉢である。全体に鉄釉が施され、内面に上下の卸目が見られる。

黒曜石剥片

黒曜石剥片は１点である。

表５　出土遺物観察表

遺物番号	番号	出土遺構	種別	器種	口径	底径	備　考
ATJ-C11-1	9-4	C 11	磁器片	皿か碗	7.6		口縁部は外反し、内面に幅5.5㎝の青の界線がめぐる。
ATJ-C11-2	9-6	C 11	磁器片	皿か碗	8.9		口縁部は直行し、内面に幅１㎜の青の界線が２本めぐる。外面にも染付の一部が見られる。
ATJ-C11-3	9-7	C 11	磁器片	皿か碗	9.0		口縁部は内彎する。全体的に青味をおびている。白釉が施される。
ATJ-C11-4	9-5	C 11	磁器片	皿	8.2		口縁部は直行し、内面は青の釉が施される。外面は全体的に青味をおび、白釉が施される。
ATJ-C11-5	9-8	C 11	磁器片	碗	9.2		白磁様の磁器片であり、口縁部は外反し、白釉が施される。
ATJ-C12-1	9-12	C 12	磁器片	皿			白磁様の磁器片であり、白釉が施される。
ATJ-C12-2	9-3	C 12	磁器片	皿	7.4		口縁部は直行し、外面の口縁部端に連続渦文が見られる。
ATJ-C15-1	9-13	C 15	磁器片	皿か碗			白磁様の磁器片であり、内面に染付の一部が見られ、白釉が施される。
ATJ-C15-2	9-1	C 15	磁器片	皿	4.8		口縁部は直行し、外面に染付の一部が見られる。白釉が施される。全体的に青味をおびている。
ATJ-C17-1	9-11	C 17	陶器	擂鉢			全体に鉄釉が施され、内面に上下の卸目が見られる。
ATJ-C17-2	9-14	C 17	磁器片	皿			内･外面に染付の一部が見られる。白釉が施される。
ATJ-C17-3	9-2	C 17	磁器片	碗	6.2		白磁様の磁器片であり、口縁部は外傾し内･外面に１～２㎜の青の界線が２本めぐる。白釉が施される。
ATJ-C17-4	9-9	C 17	磁器片	碗		9.6	見込の周辺を１㎜のこん色の２本の界線がめぐる。外面も同様に（見込の外面であり底の部分）2本の界線がめぐり、その中央には略化した連弁帯が施される。
ATJ-C17-5	9-10	C 17	景徳鎮様磁器	高台付皿		4.6	見込に青の花文が描かれ、外面にも染付の一部が見られる。高台の内面は釉剥ぎされている。
ATJ-C11-6	9-15	C 11	黒曜石剥片				



第９図　出土遺物実測図

第４章　寺屋敷入口部分C20の調査概要

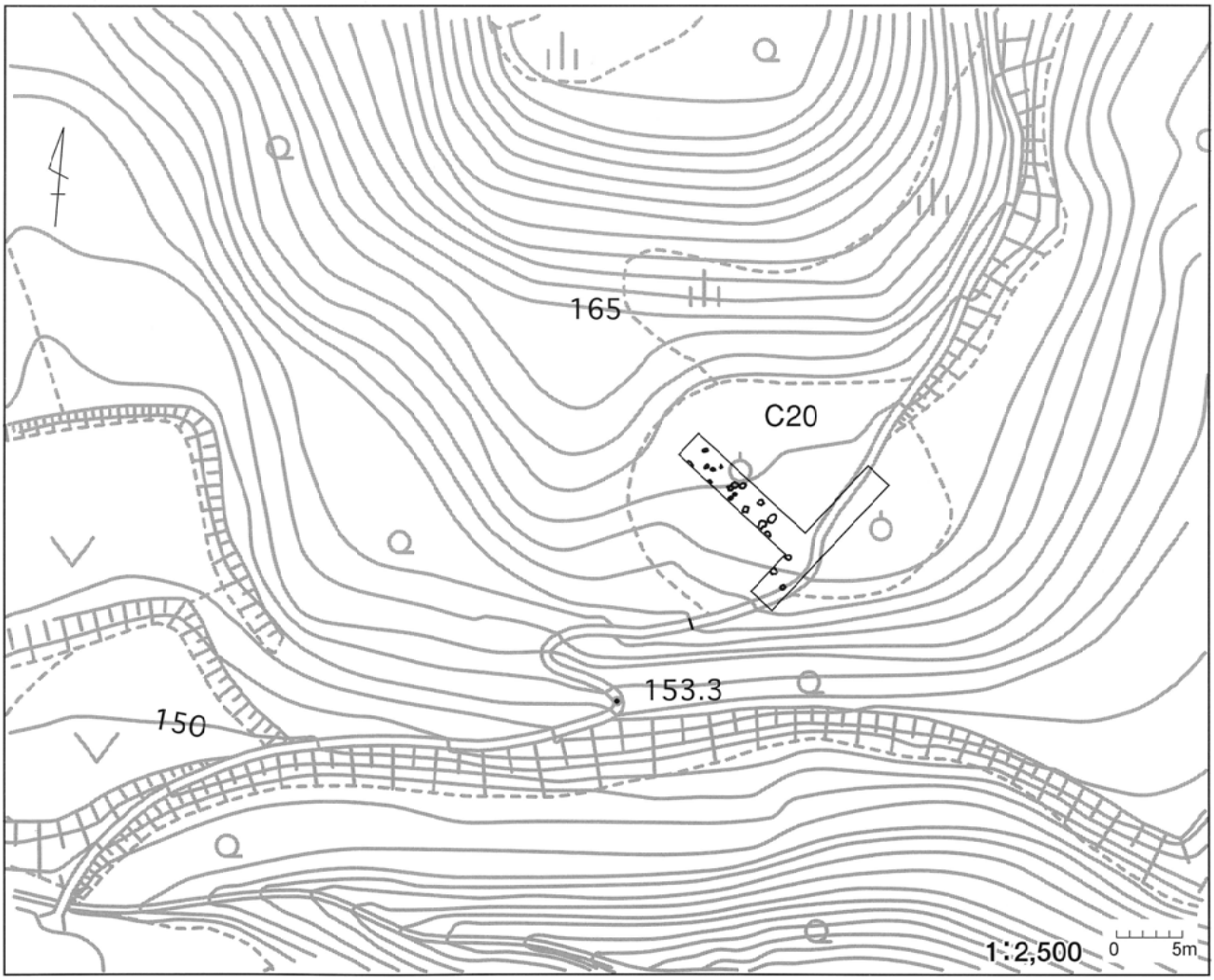
第１節　発掘調査の方法

蛇沢から寺屋敷へのルートの途中に位置する曲輪である。寺屋敷に入るための入口となる部分であるかどうかを確認するために、曲輪の西側に幅２ｍの直行するトレンチを設定して、遺構・遺物の確認を行った。

遺構の平面及び断面図は基本的に１／50とした。調査終了後は全ての調査区で埋め戻しを行った。

第２節　調査の経過

５月17日から始まった八幡座東曲輪群の調査終盤に、八幡座東曲輪群の埋め戻しと平行してＣ20の発掘調査を実施した。調査期間は、埋め戻しも含めて７月６日から７月８日まで、実働３日間である。調査経過は、表４のとおりである。



第10図　C20全体遺構配置図

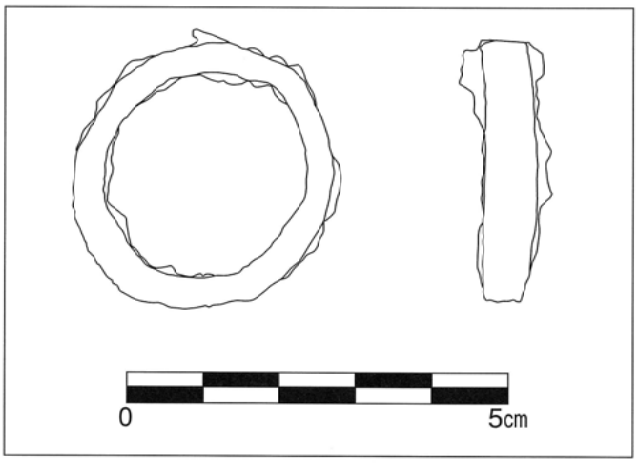
第３節　検出遺構

Ｃ20は、蛇沢から寺屋敷Ｃ８に入るためのルートとなる部分に位置する小曲輪であるが、その入口となるような遺構が認められるかどうかを確認するための調査である。北側はＣ９から小曲輪を２～３段経て11.5ｍ下に配置されている。南側の蛇沢ののぼり口から東に３段の小曲輪があり、緩やかな上りの斜面になっており、Ｃ20を通過し、寺屋敷Ｃ８へ到達する。東側は檜木沢で、４段程度の曲輪を経て37ｍ下の檜木沢に落ちる急崖であり、天然の要害となっている。

Ｃ20の西側に直交する２つのトレンチを設定して遺構の状況を確認した。１トレンチは13ｍ×２ｍ、２トレンチは11ｍ×２ｍである。20～35㎝で岩盤に達すが、岩盤までの層は１層で比較的しまりのゆるい灰褐色土である。試掘トレンチの西側からまとまった柱穴が認められる。根固石が認められる柱穴跡を２箇所確認している。柱穴跡については、抜きとり痕や、重複しているものがあるため、２～３回の建てかえがあったことが分かる。全て柱が抜き取られた跡である。

第４節　出土遺物

鉄製品が１点である。内径2.0㎝、外径3.4㎝の環状をなしている。



第11図　出土遺物実測図

出土遺物

出土遺物

第５章　縄張調査

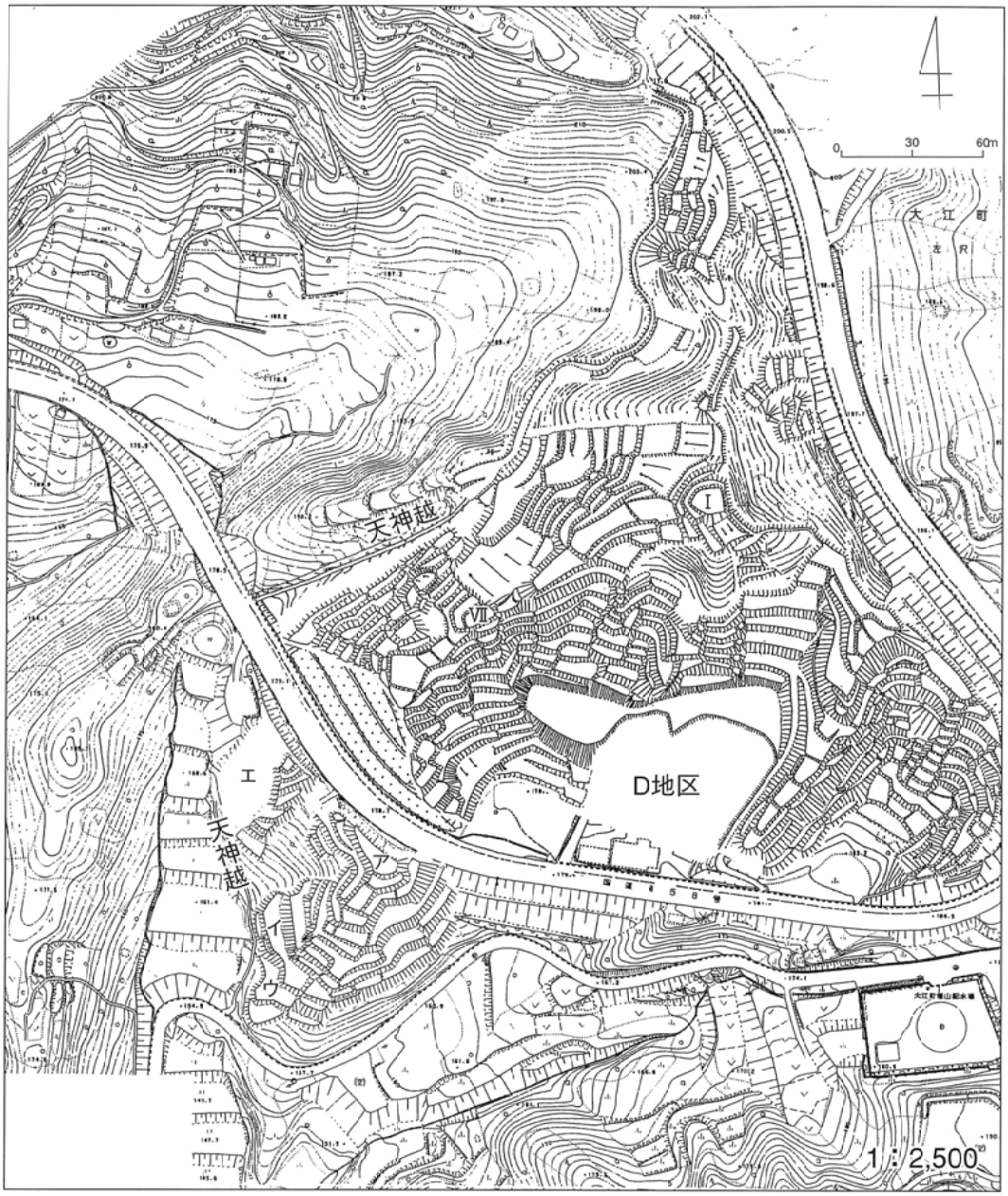
第１節　調査区域

縄張調査は、Ａ～Ｄ地区に対し実施してきた（第１図参照）。今年度は、平成12・13年度に調査を行ったＤ地区の国道458号により分断された南斜面未調査地、及び同東斜面から平成11年度に調査を行った北外郭まで連続する斜面一帯を調査区域とした。

この一帯は、あやめ沼を取り囲む朝日少年自然の家のキャンプ場となっているが、現平坦地は裏山の曲輪群及び自然の家が整備される以前の丘陵から連続した曲輪群であると考える。なお、本調査区は概略図のＢ～Ｄ地区それぞれの範囲に含まれるため、あやめ沼周辺未調査地と標記する。

調査日は、11月20・21・27日の３日間である。

第12図　縄張調査位置図



第13図　D地区南斜面縄張図

第２節　D地区南斜面調査

Ｄ地区の縄張は、標高228ｍの最高所である主曲輪Ｉを中心として、そこから３方に伸びる尾根上及びその斜面に構築された多数の曲輪群によって構成されている。そのうちの主曲輪より南西に伸びる尾根、曲輪Ⅶを核とする地域の南南西斜面は国道458号により分断され、そこから麓までの延長が未調査地となっていた。

国道により寸断された平坦地アより南西方向の尾根上に、10段ほどの腰曲輪及びそれに数10㎝程の段差で東西両側に接続展開する帯曲輪が確認された。小屋掛けが可能な程度の広さを有する曲輪は存在しないが、麓近くの曲輪イ・ウはまさに天神越え街道を見下ろす位置にあり、街道を押さえる役割を担っていたと思われる。

なお、排石場となっているエ周辺は、破壊が著しく当時の状況を把握することはできないが、僅かに平坦地が残っており、ここにも曲輪群があったことが推察される。

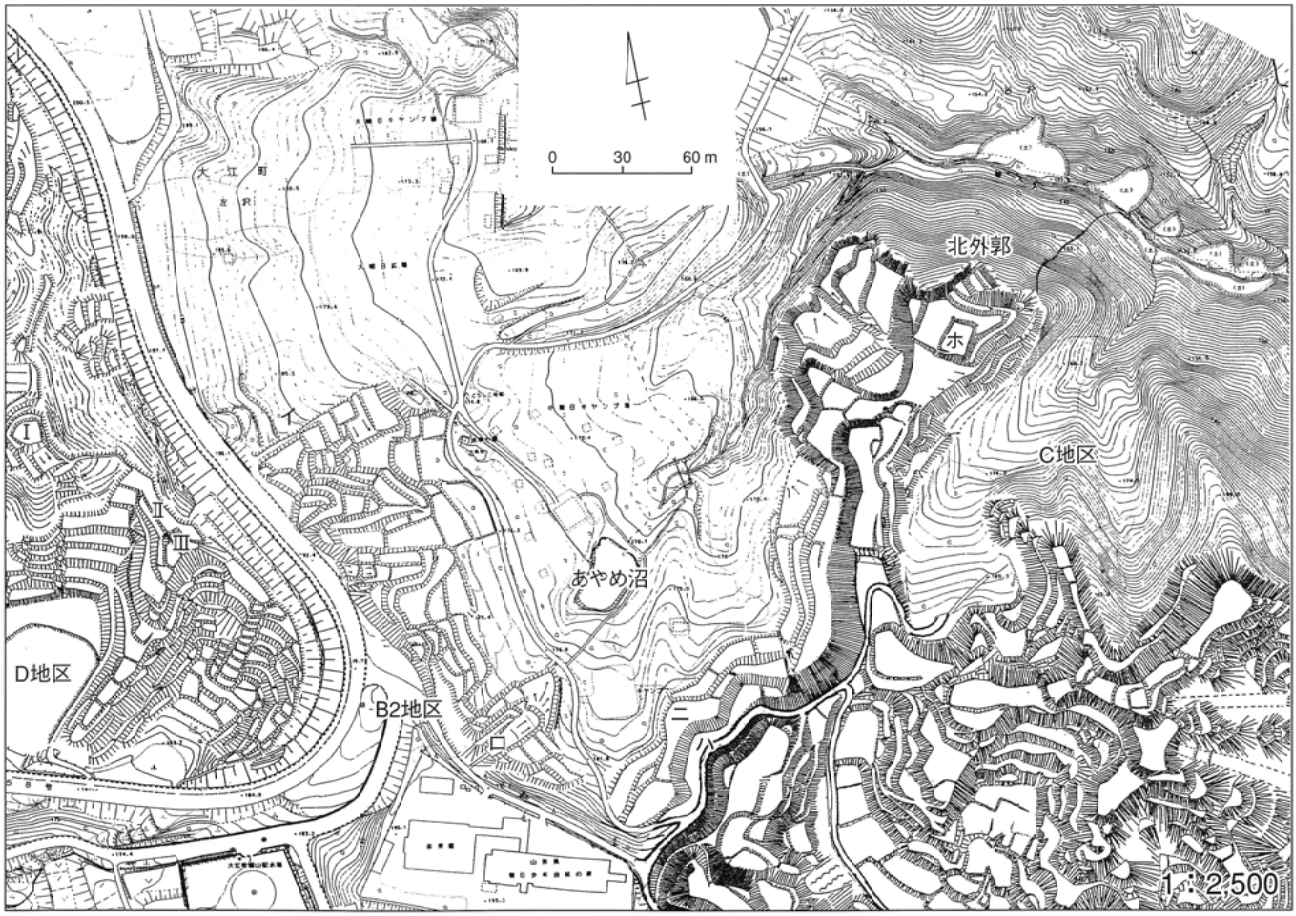
第３節　あやめ沼周辺の調査

Ｄ地区東南尾根の中心曲輪Ⅲより東側斜面は、国道の開削により破壊されているが、国道の下方に連続する平坦地が存在する。ここは現在朝日少年自然の家のキャンプ場として利用されているが、上部裏山の曲輪群との類似性やキャンプ場として不必要な設備との判断から、裏山から連続した曲輪であると考える。それぞれ尾根上に築かれた腰曲輪と隣の尾根とを結ぶ帯曲輪とが有機的に連結しており、さらに入り込んだ谷間にも段差による区画が認められ、裏山南斜面同様堅固な造りといえる。麓近くは傾斜が緩く、曲輪の面積もかなり広くなっている。なお、イより北方は近年の開発・破壊のため判断できない。

Ｂ２地区、朝日少年自然の家北側の斜面には、傾斜のある比較的大きな曲輪が二段ロとその両側に付随する三段ほどの曲輪群がある。これらは、自然の家造成以前にあった丘陵より連続していたものと考えられ、削平される以前には、丘陵にも何らかの防御設備が存在していたものと思われる。

自然の家から北外郭方面に至る農道脇の細長い曲輪ハより、急峻な５～６ｍほどの切岸下に東西45m、南北最大幅12mの大きな曲輪ニがある。曲輪ニよりさらに北東に、小さな段差で区画された２～３段の帯曲輪が続き、北外郭の西側曲輪群に接続している。北外郭そばの平坦地ホの北側は切岸に向かって傾斜しており、これは北外郭の西側斜面最下層の曲輪と同様に造成途中の感である。

これらのあやめ沼に臨む曲輪群は、それぞれ上部の中心曲輪から連続した曲輪群であるが、何に対する、何を目的とする曲輪であるか全く検討されておらず、未解明の状態である。



第14図　あやめ沼周辺縄張図

第６章　総括

発掘調査の成果

八幡座東曲輪群は、八幡座の東側、寺屋敷の西側に位置する主要曲輪群である。寺屋敷は城内でも最大に近い面積を有しており、西側は10mの切岸、東は非常に深い檜木沢があり、城全体の東端に位置する極めて防御意識が高い曲輪であると考える。５間×５間、また６間×４間の掘立柱建物、その南側に６石組列を配した池状の遺構が認められる。左沢楯山城の中で特別な人を招き入れるような宗教・儀礼的空間であったと考えられる。

八幡座は、標高222mで左沢楯山城の山頂である。山頂となる曲輪は非常に小さい曲輪であるが、山頂とその下で北東にのびる細長い曲輪からは櫓跡が認められ、その周辺を取り囲む曲輪群には主郭に相当するような建物跡は認められる。この曲輪は桁行５間、梁間２間半、四面廂のついた掘立柱建物跡が認められる。建てかえが認められない。ここは「ゴホンマル」と呼ばれていることから「ゴホンマル」を守る、軍事的な意味を持つ曲輪群であると考えている。

八幡座東曲輪群は、左沢楯山城内で主要と考えられる曲輪―八幡座・寺屋敷の間に位置する曲輪群である。この曲輪群の一番北になる曲輪、そして最頂部Ｃ13からは四方の見晴らしがよくきく位置にある。帯曲輪を配しながら、10～20mの堅固な切岸を造成し、曲輪の周辺に侵攻する敵に対する防御意識が感じさせれる構造である。見張りをするためなのか、２～３回の建てかえが認められる掘立柱建物を建て、切岸など人工的な造成によりこの曲輪群を軍事的に利用している。

Ｃ20は、寺屋敷Ｃ８に入るための入口にあたるような遺構の確認を期待したが、柱穴跡は確認できたもののその性格については明らかではない。

発掘調査については、これまで実施してきた調査成果をまとめていく。またＡ地区元屋敷の居館跡の調査を実施していく。

縄張調査の成果

縄張調査は、Ｄ地区の国道458号で分断された南側斜面未調査地及びあやめ沼周辺、同東側斜面から北外郭まで連続する斜面一帯の調査である。

Ｄ地区南側斜面は国道で分断されているが、Ｄ地区から連続する曲輪であることが確認できた。また、あやめ沼周辺についても国道458号で破壊されているものの、国道下方に連続する平坦地の状況が上部裏山の曲輪群に類似していることなどから、それに連続する曲輪であると判断した。

縄張調査については、城域と考えている範囲の調査をほぼ完了した。今後は、この縄張図を元に城の構造をより具体的にしていくための調査を実施していく。

写真１　曲輪状況①
C11からC12

写真２　曲輪状況②
C11からの通路

写真３　曲輪状況③
C14からC13

写真４　曲輪状況④
C18からC16・17

写真５　C11遺構状況

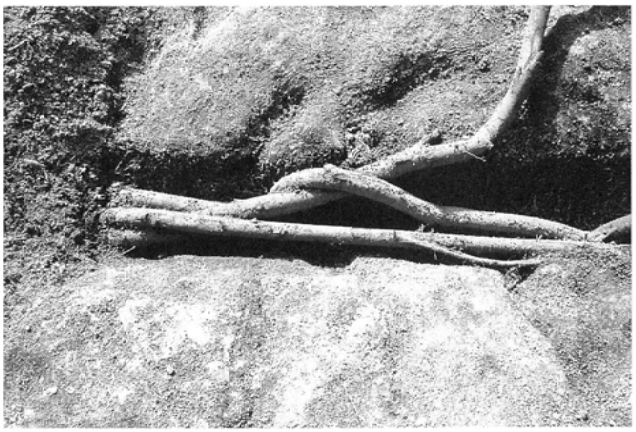


写真６　C11SD1
木の根が入り込んでいる状況

写真７　C12SB4西側桁の柱列
下からC12P32・P31・P29・P13

写真８　C12SB4北側梁の柱列
下からC12P13・P17・P22・P26

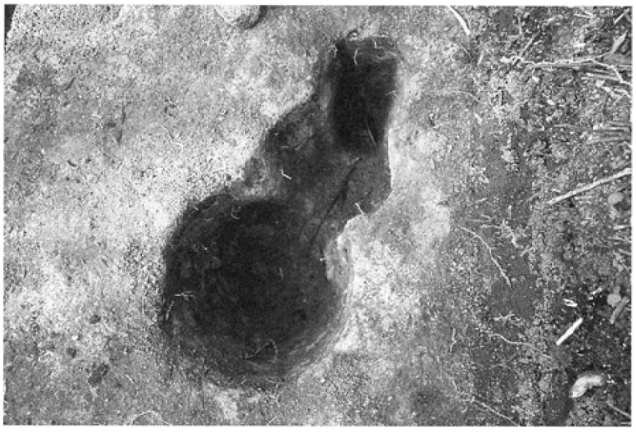


写真９　C12P37・P36・P35
下からC12P37・P36・P35

写真10　C12P30

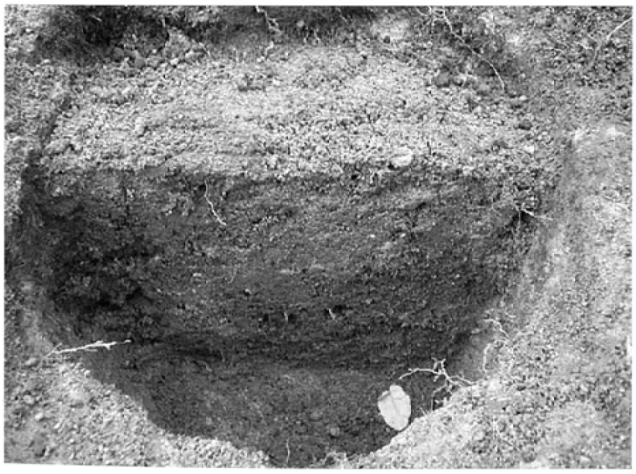


写真11　柱穴断面
山砂利混入黄褐色土

写真12　C13トレンチ精査後の状況
黄褐色粘質土

写真13　C17遺構状況
南から北

写真14　C17SK1
小竪穴土坑

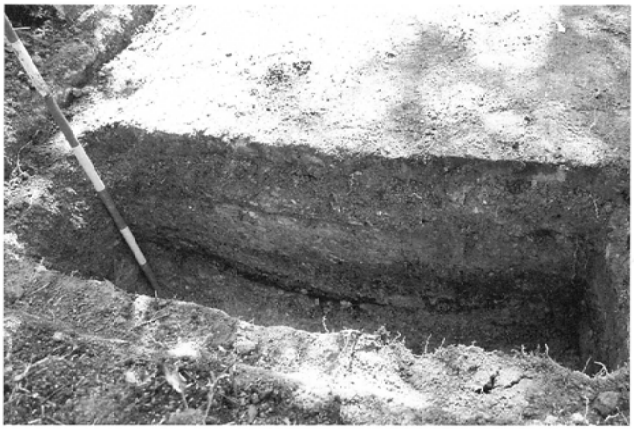


写真15　C17SK1
小竪穴土坑深さ

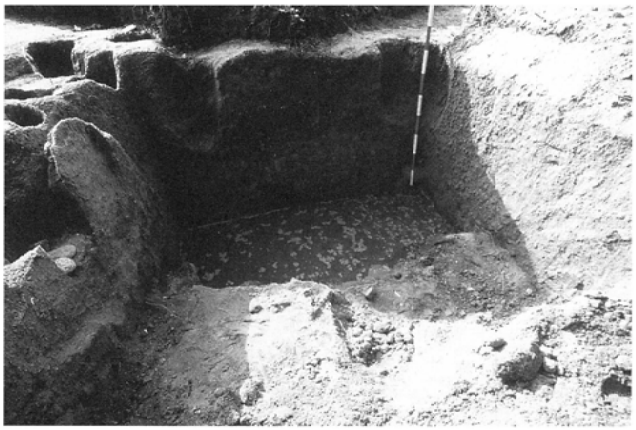


写真16　B１千畳敷地下室
北西壁面

写真17　C19遺構状況
南から北　C18から

写真18　井戸跡（SK4）

写真19　八幡座周辺C5
土坑跡

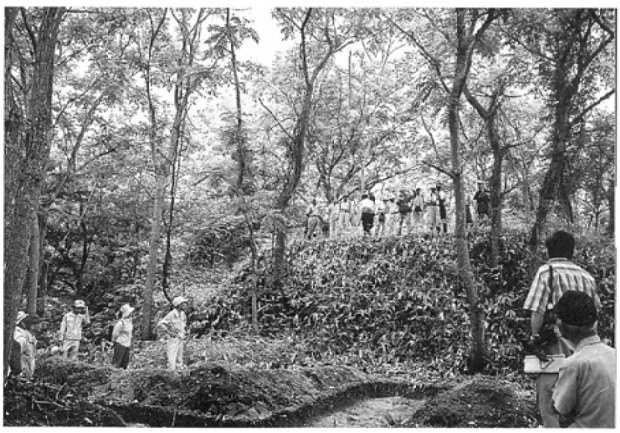
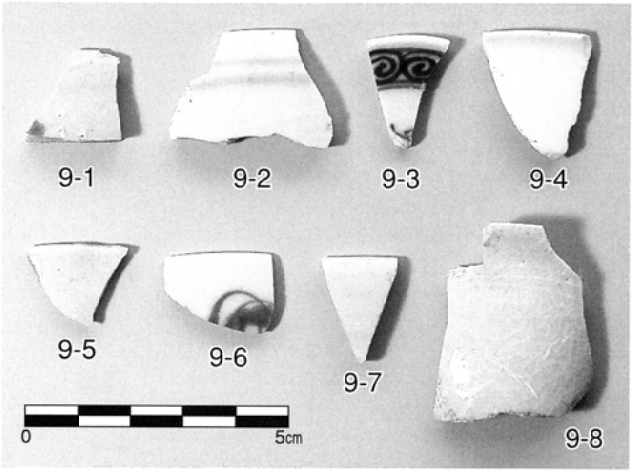


写真20　現地説明会状況
一般の部（6月28日）
C17からC19を見下ろす



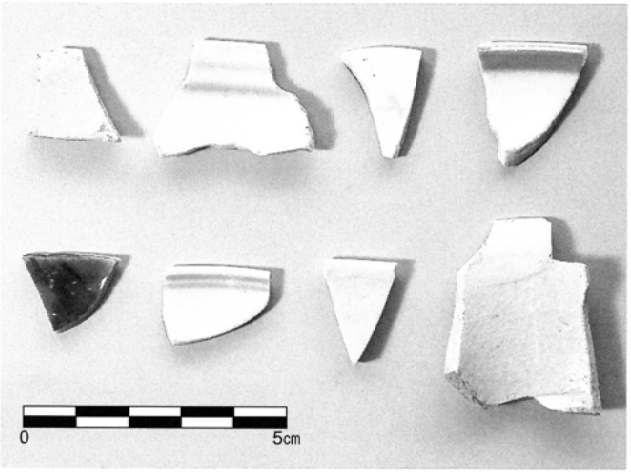
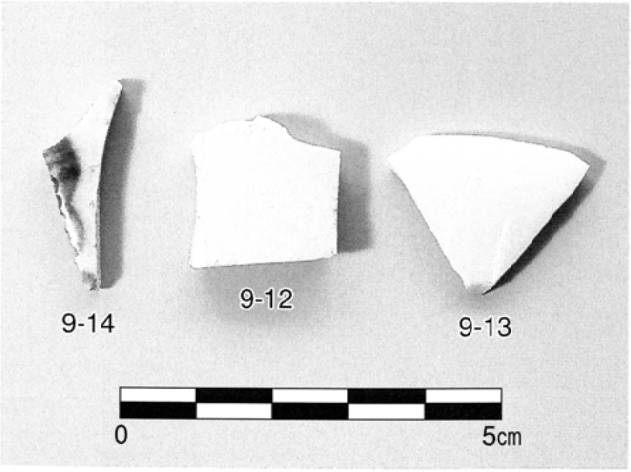


写真21　出土遺物①



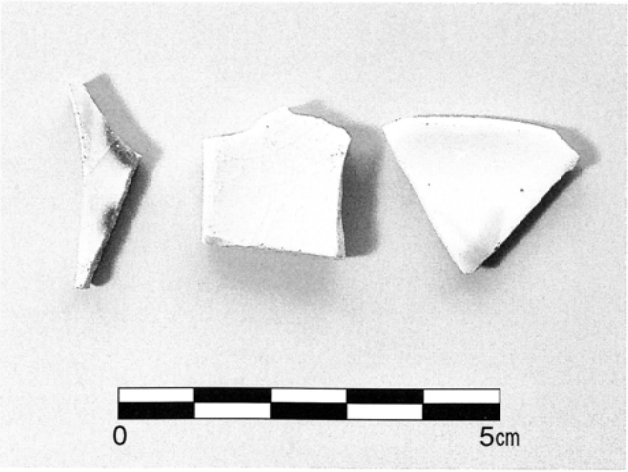


写真22　出土遺物②

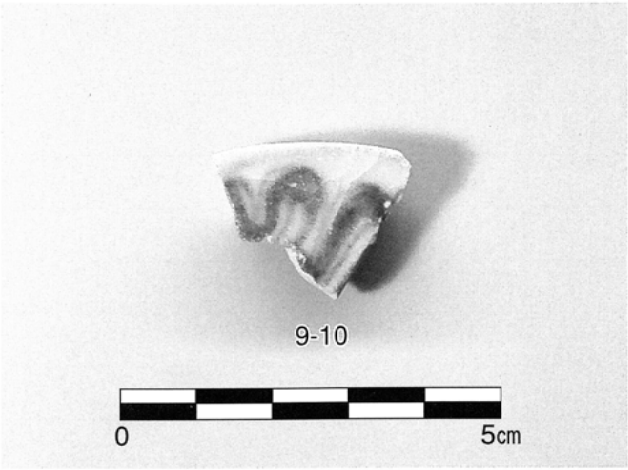
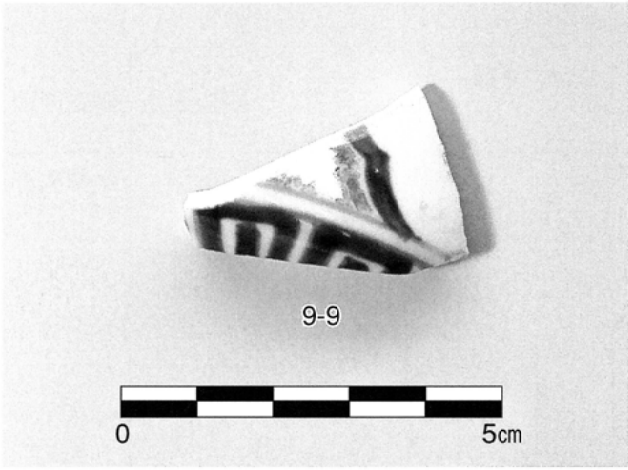


写真23　出土遺物③



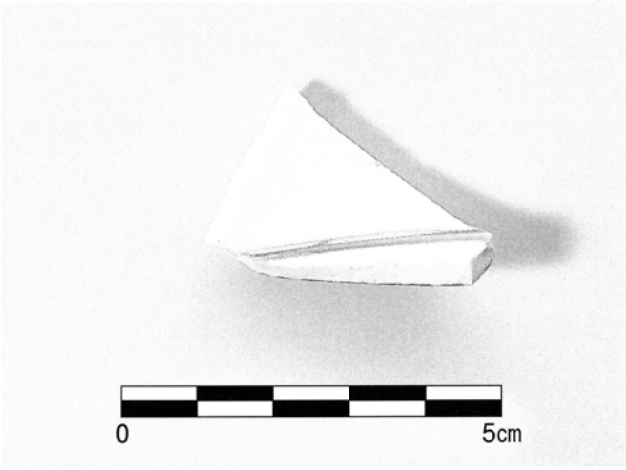


写真24　出土遺物④

写真25　出土遺物⑤

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢楯山城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
著者名	日下部　美紀
編集機関	大江町教育委員会・左沢楯山城遺跡関連調査委員会
所在地	〒990－1163　山形県西村山郡大江町字本郷丁373－1
発行年月日	2005年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
あてらざわたてやまじょういせき 左沢楯山城遺跡	やまがたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡 おおえまちおおあざあてらざわあざたてやま 大江町大字左沢字楯山	324	001			2004.5.17 ～ 2004.7.8		学術調査
はちまんざひがしくるわぐん 八幡座東曲輪群				38° 23′ 10″	140° 13′ 10″		440㎡	
てらやしきいりぐちぶぶん 寺屋敷入口部分				38° 23′ 05″	140° 13′ 00″		50㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
左沢楯山城遺跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡 小竪穴土坑・溝跡	陶磁器片・鉄製品

大江町埋蔵文化財調査報告書　第８集

山形県西村山郡大江町
左沢楯山城遺跡調査報告書(6)

発行日　平成17年（2005年）３月

編　集　大江町教育委員会
発　行　山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印　刷　株式会社　若月印刷
山形県西村山郡大江町大字左沢105